

市道福浦法田線道路改良その6工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

## 福浦法田峠2号墳

平成30(2018)年3月

島根県松江市教育委員会  
公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団

A highly pixelated, black and white version of the Seal of the Commonwealth of Massachusetts. The seal features a central shield depicting an Algonquian Native American holding a bow and an arrow pointing downwards. Above the shield is a crest showing a bent arm holding a broadsword. A five-pointed star is located in the upper left corner of the shield. Above the scroll is a crest featuring a bent arm holding a broadsword. Above the crest is a small circular emblem.

This image is a highly pixelated, low-resolution representation of a scene. It features a dark gray, elongated object positioned horizontally across the middle of the frame. The object is surrounded by a light gray background. There are several other small, darker gray pixels scattered across the image, which appear to be artifacts from the low resolution or noise in the original image.

A highly pixelated, black and white version of the Seal of the Commonwealth of Massachusetts. The seal features a central shield depicting an Algonquian Native American holding a bow and an arrow pointing downwards. Above the shield is a crest showing a bent arm holding a broadsword. A five-pointed star is located in the upper left corner of the shield. Above the shield is a scroll banner with the state motto "Ense petit placidam sub libertate quietem". Above the scroll is a crest featuring a bent arm holding a broadsword. Above the crest is a small emblem. The entire design is enclosed in a circular border.

This image is a 16x16 pixel grayscale representation. It features several thick, dark gray vertical bars of varying heights and positions. The most prominent bar is located in the upper-left quadrant, extending from the top to approximately the middle of the frame. Another large bar is positioned vertically along the right edge. In the lower half of the image, there are two more vertical bars: one on the far left and another on the far right. The background is predominantly white, with scattered small gray pixels representing noise or artifacts. The overall effect is a minimalist, abstract graphic.



市道福浦法田線道路改良その6工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

ふく うら はう だ とうげ ごう ふん  
**福浦法田峠2号墳**



平成30(2018)年3月

島根県松江市教育委員会  
公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団





発掘調査現場から大山を望む

巻頭図版2



南の境港市から調査地を望む(矢印が2号墳)



玄室から開口方向(伯耆側)を望む(北から)



墳丘断面（南から）



玄門前遺物出土状況（南から）

卷頭図版4



福浦法田峠2号墳出土遺物(一部)



玄室出土玉類

## 例　言

- 本書は、平成 29 年度に委託を受けた、市道福浦法田線道路改良その 6 工事に伴う福浦法田峠 2 号墳の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 本書で報告する発掘調査は、松江市都市整備部土木課から松江市教育委員会が依頼を受け、松江市まちづくり文化財課埋蔵文化財調査室が現地調査を行い、報告書の作成を公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団が実施した。
- 遺跡の名称・所在地、調査面積は以下のとおりである。

名 称 福浦法田峠 2 号墳

所在地 島根県松江市美保関町福浦 501-2

調査面積 122.32m<sup>2</sup>

- 現地調査の期間及び報告書作成期間

平成 27 年 12 月 10 日～平成 28 年 2 月 26 日（現地調査）

平成 29 年 11 月 1 日～平成 30 年 3 月 20 日（報告書作成）

- 各年度の調査組織

依頼者 松江市 市長 松浦 正敬（土木課）

主体者 松江市教育委員会 教育長 清水 伸夫

### [平成 27 年度] 現地調査

事務局 松江市歴史まちづくり部 部長 安田 憲司

〃 まちづくり文化財課 課長 永島 真吾

〃 〃 専門官（埋蔵文化財調査室長兼務） 飯塚 康行

### 調査指導

島根大学法文学部 教授 大橋 泰夫

〃 准教授 岩本 崇

島根県埋蔵文化財調査センター 内田 律雄

島根県立古代出雲歴史博物館 主任学芸員 仁木 聰

島根県教育庁 文化財課 課長 丹羽野 裕

〃 〃 主幹 深田 浩

### 実施者 松江市まちづくり部まちづくり文化財課

埋蔵文化財調査室 調査係 係長 赤澤 秀則

〃 " " 主任 川上 昭一（担当者）

〃 " " 主任 青山 賢

〃 " " 主任 落合 智之

〃 " " 主任 徳永 隆

松江市まちづくり部まちづくり文化財課

埋蔵文化財調査室 調査係 主任主任 日野一輝

〃 〃 〃 嘴 託 門脇誠也、金森みのり、  
小川真由美、高尾万里子

[平成29年度] 報告書作成業務

事務局	松江市歴史まちづくり部	部長	藤原 亮彦
	〃 次長(まちづくり文化財課長兼務)		永島 真吾
	〃 まちづくり文化財課		
	〃 〃 専門官(埋蔵文化財調査室長兼務)		飯塚 康行
	〃 〃 埋蔵文化財調査室 調査係 係長	長	赤澤 秀則
	〃 〃 〃 主幹	幹	川上 昭一
	〃 〃 〃 嘴託	託	門脇 誠也
調査指導	島根県立松江北高等学校	教諭	大谷 晃二
	島根県立古代出雲歴史博物館 交流・普及課	長	角田 徳幸
	出雲市出雲弥生の森博物館	学芸調整官	花谷 浩(H28年度当時)
実施者	公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団	理事長	清水 伸夫
	埋蔵文化財課 課長	曾田 健	
	〃 調査係 係長	川西 学	(担当者)
	〃 〃 嘴託	渡邊 真二	

6. 本書に記載した主頭大刀の実測図の作成は大谷晃二氏が行った。
7. 本書に記載した遺物の復元・実測・浄書、遺構図版の作成は以下の者が行った。  
渡邊真二 塩田陽子
8. 本書の執筆・編集は松江市埋蔵文化財調査室の協力を得て川西が行った。
9. 本書における土器区分、分類、編年は以下の分類に従った。

[須恵器]

大谷晃二 1994「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌 第11集』 島根考古学会

[奈良・平安時代以降の須恵器、土師器、土師質土器]

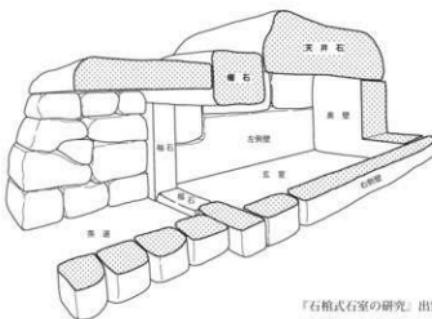
2013「史跡出雲国府跡9 総括編」島根県教育委員会

10. 本書における方位は公共座標北を示し、座標値は世界測地系に準拠した公共座標第III系の値である。また、レベルは海拔標高を示す。
11. 本書における遺構記号は以下のとおりである。

SD:溝 SK:土坑

12. 掲載した遺構図の縮率は各図に縮率とスケールを明記した。遺物実測図の縮率は原則1/3とし、断面は土師器を白ヌキ、須恵器を黒塗り、石製品を斜線で示した。

13. 横穴式石室各部の名称については、下記の図を参照。
14. 報告書作成は、遺構図、遺物図は IllustratorCS6(Adobe 社)で作成し、図版レイアウト、原稿執筆など編集作業は InDesignCS6(Adobe 社)で行った。
15. 出土遺物、実測図及び写真等の資料は松江市教育委員会で保管している。



『石棺式石室の研究』出雲考古学研究会 1987 年  
より再トレスの後、一部改変して使用。

横穴式石室各部の名称

# 本文目次

## 例言

第1章 位置と環境	1
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	2
第2章 調査に至る経緯	5
第1節 調査に至る経緯	5
第3章 墳丘の調査	7
第1節 墳丘の構造	7
第4章 埋葬施設の調査	12
第1節 主体部の概要	12
第2節 玄室の調査	12
第1項 玄室の構造	12
第2項 出土遺物	16
第3節 玄門部の調査	20
第1項 玄門部の構造	20
第2項 出土遺物	21
第4節 羨道部の調査	22
第1項 羨道部の構造	22
第2項 出土遺物	23
第5章 基底部の調査	26
第1節 基底部の構造	26
第2節 SK01の調査	26
第6章 総括	29
第1節 福浦法田岬2号墳主体部に使用された石材について	29
第2節 福浦法田岬2号墳の築造過程	30
第1項 墳丘・石室の築造過程	30
第2項 SK01と古墳築造に伴う祭祀行為	32
第3節 出土須恵器から見た福浦法田岬2号墳	33
第1項 須恵器の出土地点から見た初葬時期と追葬・進入時期	33
第4節 主頭大刀から見た福浦法田岬2号墳の位置付け	39
第5節 島根半島東部における福浦法田岬2号墳の位置付け	40
第6節 周辺地域と比較した島根半島東部の横穴式石室の特徴	43
第7節 結語	47
遺物観察表	49
写真図版	
報告書抄録	

## 挿図目次

第 1 図	調査地位置図	1
第 2 図	周辺の遺跡分布図	2
第 3 図	開発範囲と調査区位置図	5
第 4 図	開発範囲と調査範囲図	6
第 5 図	調査前墳丘測量図	7
第 6 図	墳丘測量図及び遺構配置図	8
第 7 図	墳丘断面図	9
第 8 図	列石平面・立面図	11
第 9 図	石室実測図	13・14
第 10 図	主体部基底石及び栗石検出状況図	15
第 11 図	玄室遺物出土状況図	16
第 12 図	圭頭大刀柄頭実測図	16
第 13 図	圭頭大刀刀身片	17
第 14 図	玄室出土装身具実測図	18
第 15 図	玄室出土須恵器・土師器	19
第 16 図	玄門石平面図・断面図	20
第 17 図	玄門部遺物出土状況図	21
第 18 図	玄門部出土遺物①	21
第 19 図	玄門部出土遺物②	22
第 20 図	羨道部遺物出土状況図	23
第 21 図	羨道部出土須恵器・鉄製品	24
第 22 図	主体部掘形平面図と SKO1 遺物出土位置	27
第 23 図	SKO1 出土須恵器	28
第 24 図	玄室石材表面に残る加工痕	29
第 25 図	古墳の築造過程①	31
第 26 図	古墳の築造過程②	32
第 27 図	主体部遺物出土状況図	35
第 28 図	主体部遺物出土状況見通し図	36
第 29 図	主体部進入回数模式図	37
第 30 図	出雲地域における装飾付大刀分布図(Ⅱ段階)	39
第 31 図	島根半島東部の横穴式石室の構造比較	42
第 32 図	出雲地域の横穴式石室と地域色	44
第 33 図	島根半島における出雲 4 期の横穴式石室	45
第 34 図	石州府 1 号墳実測図	46

## 挿表目次

表 1	出土遺物と主体部進入時期	38
表 2	島根半島東部における後期古墳・横穴墓	41
表 3	島根半島東部の横穴式石室の構造	43

## 写真図版目次

巻頭図版 1	発掘調査現場から大山を望む
巻頭図版 2	南の境港市から調査地を望む(矢印が2号墳)、玄室から開口方向を望む(北から)
巻頭図版 3	墳丘断面(南から)、玄門前遺物出土状況(南から)
巻頭図版 4	福浦法田岬2号墳出土遺物(一部)、玄室出土玉類

写 真 1	列石と主体部(東から)	11
図 版 1	1 調査現場から大山(伯耆富士)を望む(北西から)、2 調査前遠景(西から)	
図 版 2	1 墳丘断面(南から)、2 墳丘断面東側(南から)	
図 版 3	1 墳丘西側断面(南から)、2 周溝断面(南から)	
図 版 4	1 主体部検出状況(南から)、2 側石基底石検出状況(南西から)	
図 版 5	1 主体部全景(南から)、2 羨道部から玄門・玄室を望む(南から)	
図 版 6	1 玄室完掘状況(北から)、2 玄室東側壁(西から)、3 玄室西側壁(東から)、 4 耳環・勾玉出土状況(東から)、5 同左拡大(東から)、 6 玄室内須恵器・圭頭大刀検出状況(北東から)、7 同左拡大(北東から)	
図 版 7	1 玄門部袖石・樋石(南から)、2 右袖石検出状況(西から)、 3 左袖石検出状況(南から)、4 玄門前集石(東から)、 5 右袖石根固め石検出状況(西から)	
図 版 8	1 羨道部右側壁検出状況(西から)、2 羨道部左側壁検出状況(東から)	
図 版 9	1 羨道部上層断面(南から)、2 左側壁根固め石検出状況(南西から)、 3 右側壁根固め石検出状況(南東から)、 4 玄室両側壁・奥壁根固め石検出状況(南から)、5 SKO1 検出状況(南から)	
図 版 10	1 完掘状況(南から)、2 調査指導風景、3 作業風景①、4 作業風景②	
図 版 11	1 玄室出土須恵器・土師器、2 玄門部出土遺物、3 羨道部出土須恵器(1)	
図 版 12	1 羨道部出土須恵器(2)	
図 版 13	1 羨道部出土須恵器(3)、2 SKO1 出土須恵器	
図 版 14	1 圭頭大刀柄頭	
図 版 15	1 圭頭大刀刀身	
図 版 16	1 玄室内出土耳環、2 羨道部出土鉄製品	

# 第1章 位置と環境

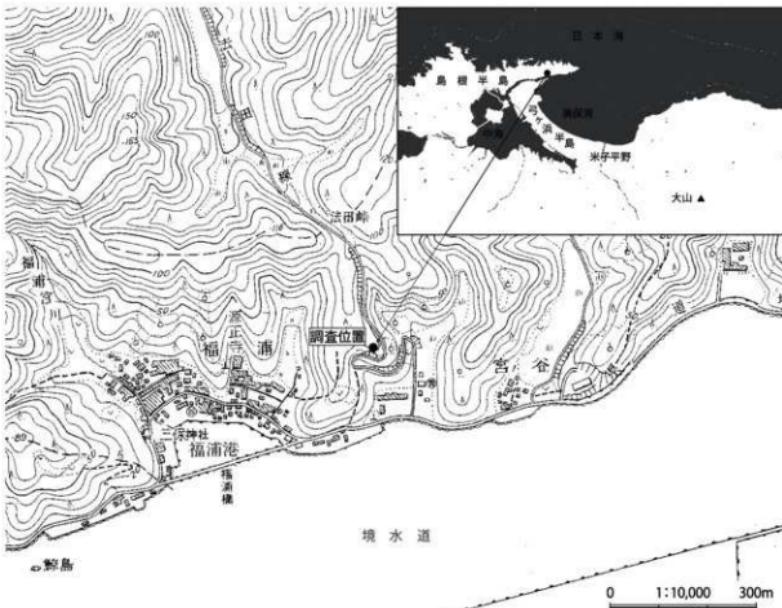
## 第1節 地理的環境 (第1図)

福浦法田岬2号墳は島根県松江市美保関町福浦に位置する。

美保関町は島根県の北東部、東西に延びる島根半島の東部にあり、北側は日本海に面して複雑に入り組んだ海岸線を形成すると共に大小様々な島が存在する。対して南側は中海と美保湾及びその2つをつなぐ境水道に面し、比較的単調な海岸線が続く。境水道を挟んで南には鳥取県境港市がある弓ヶ浜半島が南北に延びている。また、島根半島の北岸と南岸の間には200~300m前後の山々が東西に延び、南北の往来を困難なものにしている。

美保関町福浦は境水道の東、中海から美保湾への出口付近にあり、小規模な漁港である福浦港を中心として現在100戸余りの集落を形成している。

福浦法田岬2号墳は福浦港から直線距離にして北東へ約300m、南北に延びる尾根筋の東向き斜面を若干下った、標高約62mの場所に存在する。古墳からさらに東側は後世の果樹園造成の折りに削平されて急峻な斜面となり、斜面下は地山まで削られて平場が作られている。古墳の位置する場所からは境水道が眼下に一望でき、美保湾を挟んで遠くに米子平野が見渡せる。天候が良ければ南東方向には伯耆富士とも呼ばれる大山を望むことができる。



第1図 調査位置図 (S=1:10,000)

## 第2節 歴史的環境(第2図)

福浦法田岬2号墳を中心とした島根半島東端部周辺の遺跡について、時代ごとに概要を述べる。

**縄文時代** 福浦周辺では旧石器時代の遺跡はいまだ発見されておらず、縄文時代以降の遺跡しか知られていない。縄文時代の遺跡も境水道の西側入り口にある森山地区以西の中海北岸からは国の史跡に指定されているサルガ鼻洞窟遺跡や権現山洞窟遺跡をはじめとした縄文時代の遺跡が集中する地区とは対照的に、福浦を中心とした島根半島東端部では遺跡数は少ない。福浦周辺部では中期前葉から晩期後葉の土器と共に動物遺存体などが出土した小浜洞窟遺跡(20)のほかは、後期の土器が採集された玉井遺跡(26)、晩期の土器が出土した郷ノ坪遺跡(10)が存在している。この他に菅谷洞窟遺跡群(24)では黒曜石片が見つかっているが、実態はほとんど不明である。

**弥生時代** 美保関町ではもともと弥生時代の遺跡は10例あまりしか知られていない。また、本格的な発掘調査によって明らかとなった遺跡もほとんど無いのが現状である。

かつて福浦には弥生土器が出土した福浦遺跡(5)が存在したが、現在は消滅しており詳細は不明である。このほか、周辺には後期の甕型土器が採集された田尻遺跡(17)、磨製の石包丁が採集された大江遺跡(2)などが存在する。



1 福浦法田岬2号墳	10 鹿ノ坪遺跡	19 松江美保間往還	28 銀山古墳群	37 早稲田古墳
2 大江遺跡	11 鹿ノ坪古墳	20 小浜洞窟遺跡	29 海崎古墳群	38 藤土古墳群
3 路曲山城跡	12 網場古墳	21 女男岩船穴群	30 芝神山古墳	39 大矢尾古墳群
4 森山砕台跡	13 西ノ谷古墳群	22 銀川内構穴群	31 はか坂古墳群	40 離子古墳群
5 福浦遺跡	14 横谷古墳群	23 菅谷古墳	32 四名井神古墳	41 花崎古墳
6 福浦古墳	15 天神山古墳	24 菅谷洞窟遺跡群	33 前原古墳	
7 宮床古墳	16 長島遺跡	25 女男岩古墳	34 幸谷古墳群	
8 宮床古墳	17 田尻遺跡	26 三井遺跡	35 五井遺跡古墳	
9 朝場神社古墳	18 法田岬古墳	27 天神社裏山古墳群	36 男鹿古墳	

第2図 周辺の遺跡分布図(1:50,000)

**古墳時代** 古墳時代になると、遺跡数は格段に増加する。美保関町全体では福浦法田岬2号墳を除いて38古墳群104基の古墳が存在する。しかしながら、いずれの古墳も本格的な発掘調査は行われていないため、採集した遺物やもともと開口している主体部の状態などから古墳の時期を推測することしかできない。

古墳の分布状況は文字通り「津々浦々」ごとに存在するが、ある程度集中する傾向が見て取れる。福浦もその古墳が集中する地域の一つであり、周辺では東の海崎、西の宇井、北西の日本海側の七類などが古墳の集中する地域となる。

福浦近隣では福浦古墳(6)、萬屋浦古墳(7)、宮床古墳(8)、法田岬古墳(18)、が確認されている。このうち、法田岬古墳については『片江郷土誌』によると、「昭和十三年、岬切割工事中発見した。箱式石棺・出土品人骨(下顎骨)・直刀・玉類・須恵器。古墳後期のものであるが、現在は壊滅している(佐々木謙による)」と記載されている。法田岬古墳についてはこの記述のほかに資料が無く、実態は不明である。また、かつては「山賊穴」と呼ばれ、子供たちの遊び場であったと伝わっていることから、工事以前から開口していたものと思われる。古墳の位置についても詳細は不明であるが、『片江郷土誌』の記述を信じるならば、現在の市道福浦法田線上に存在していたと考えられる。このため、『片江郷土誌』に記載のある「法田岬古墳」を1号墳とし、今回発見した古墳を2号墳と命名した。

東の海崎地区周辺には天神裏山古墳群(27)、銭山古墳群(28)、海崎古墳群(29)、荒神山古墳(30)、ばかり坂古墳群(31)などが存在する。海崎古墳群1号墳と天神社裏山古墳群2・3号石室では竪穴系横口式石室が、海崎3号墳では横穴式石室が開口している。また、天神社裏山2号石室では須恵器、砥石、金環が、3号石室では須恵器、玉類、刀子などの副葬品が出土している。この他に海崎と福浦の中間に位置する場所には男鹿古墳(36)があり、横穴式石室が開口している。

宇井地区では、網場神社古墳(9)、郷ノ坪古墳(11)、網場古墳(12)、西ノ谷古墳群(13)、横山古墳群(14)や宇井と福浦の中間地点に天神山古墳(15)がある。いずれも詳細は不明であるが、網場神社古墳、網場古墳には箱式石棺があり、郷ノ坪古墳、西ノ谷1号墳は現地に残存する石材から横穴式石室であると推測される。

宇井地区から西へ約1km離れた小中村付近にも横穴及び古墳が集中する地区が見られ、ここでは女男岩横穴群(21)、殿川内横穴群(22)、菅谷古墳(23)、女男岩古墳(25)が存在する。菅谷古墳、女男古墳の主体部は箱式石棺と推測されるが、実態は不明である。殿川内横穴群は三角形断面妻入の横穴墓が2穴確認されている。女男岩横穴群では8穴の横穴墓が確認されており、1号横穴は三角形断面平入、2号横穴は三角形断面妻入、3~6号横穴は丸天井系の横穴であり、1・2・6号横穴からは須恵器片が採集されている。

日本海側の七類地区では七類港を取り巻く丘陵上に早稲田古墳(37)、蔵土古墳群(38)、大矢尾古墳群(39)、雑子古墳群(40)、花崎古墳(41)が存在するが、いずれも発掘調査は行われていないため、詳細は不明である。

多数の古墳がある一方で古墳以外の遺跡となると、散布地として郷ノ坪遺跡(10)、長島遺跡(16)、田尻遺跡(17)があるので、集落跡は見つかっておらず、当時の人々の暮らしぶりを窺わせるような

遺跡が乏しい。唯一、郷ノ坪遺跡では5世紀後半～6世紀後半にかけての製塩土器が見つかっていることから、同地周辺で製塩が営まれていたことが推測できるのみである。だが、数多くの古墳の存在が示すとおり、同地における人々の動態が希薄であったわけではなく、多くの集落遺跡が未調査のまま知られていないものと推測できる。

**歴史時代** 奈良時代に編纂された『出雲国風土記』において、本古墳周辺は島根郡の美保郷に属している。この中で、本古墳が存在する福浦は、<sup>鳥居</sup>塙道浜とされる場所と推測され、志毗<sup>マグロ</sup>(マグロ)が獲れたとの記載がある。『出雲国風土記』ではこの他にも数多くの浜や浦の地名が列挙されており、特産品としても豊富な海産物が獲れたことを窺わせる記載があることから、島根半島東部では主に漁労を営む人々の集落が浜や浦ごとにあったと推測できる。しかしながら、福浦周辺の古代における遺跡としては玉井遺跡(3)が知られているのみである。同遺跡からは縄文土器の他に8世紀代以降の須恵器片が見つかっているが、調査が行われていないため、詳細は分かっていない。

戦国時代に入ると、尼子・毛利氏の合戦の舞台として島根半島にも多くの山城が築かれる。鈴垂山城跡(3)もその内の一つであり、尼子の重臣である亀井能登守安綱の居城として伝わっている。城は外江ノ瀬戸と呼ばれていた現在の境水道を眺望できる場所に位置し、水上輸送を抑えるための重要な軍事拠点として機能していたと考えられる。なお、鈴垂山城は永禄9年(1566)ごろ、毛利方の武将である杉原盛重の計略によって落城・炎上したとの記述が『伯耆志』に見られる。

近世には、松江城から本庄を経て美保間に至る道として松江美保間往還(19)が整備され、島根半島南岸を東西に結ぶ街道として知られている。

近世においては、幕末に森山の日向灘に森山砲台跡(4)が整備され練兵場・火薬庫などがあったと伝わっており、外国船に対する松江藩の警備体制の一翼を担っていたとされる。

## 註

(1) 雜古墳群については、報告書執筆中に工事立会が行われている。

## 参考文献

美保関町・美保関町誌編纂委員会 1986 『美保関町誌』上・下巻

島根県古代文化センター・島根県教育庁理蔵文化財調査センター 2009 『サルガ鼻洞窟遺跡・椎現山洞窟遺跡』

島根県古代文化センター編 2014 『解説出雲国風土記』

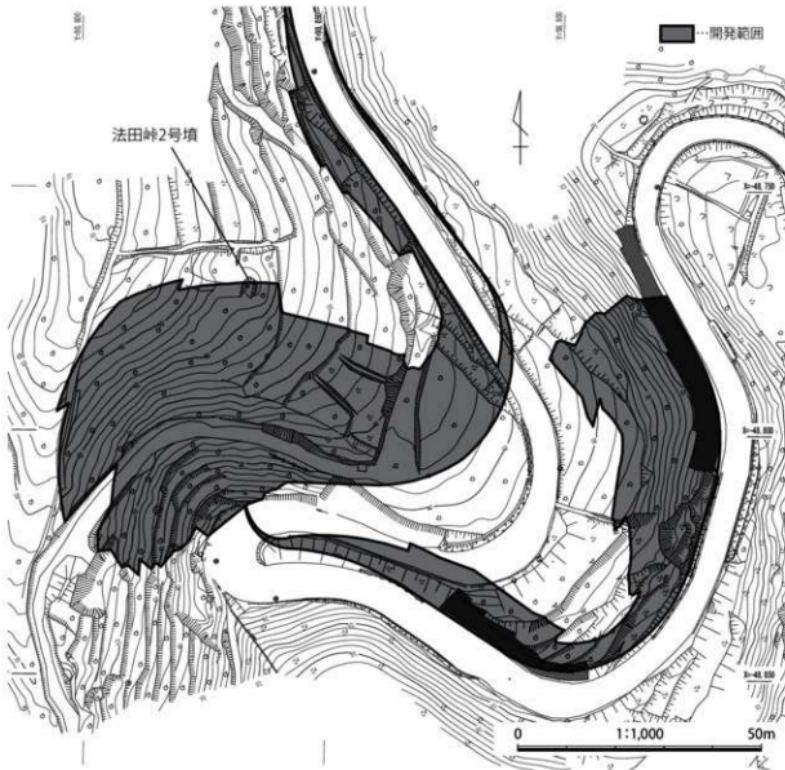
松江市史編集委員会 2012 『松江市史』史料編2

## 第2章 調査に至る経緯

### 第1節 調査に至る経緯

平成27年12月1日、市道福浦法田線道路改良その6工事予定地において、松江市土木課より伐採が完了した際に古墳のような地面の高まりがあるとの一報が市埋蔵文化財調査室に入った。これを受けて12月2日に現地踏査を実施したところ、墳丘及び主体部と思しき中心部に盗掘坑と考えられる落ち込みが見つかり、古墳であることを確認した。

古墳は工事予定地の境界付近にあり、墳丘の南側半分程度が工事により削平される位置であった。土木課と埋蔵文化財調査室との間で遺跡保護の協議を行ったが、既に工事発注も終わり工事に取り掛かっている状況であることから、これを設計から見直すことは現実的に困難との結論に達した。このため、やむを得ず古墳の現地保存を断念し、別記のとおり文化財保護法上の手続きをとり、12月10



第3図 開発範囲と調査区位置図

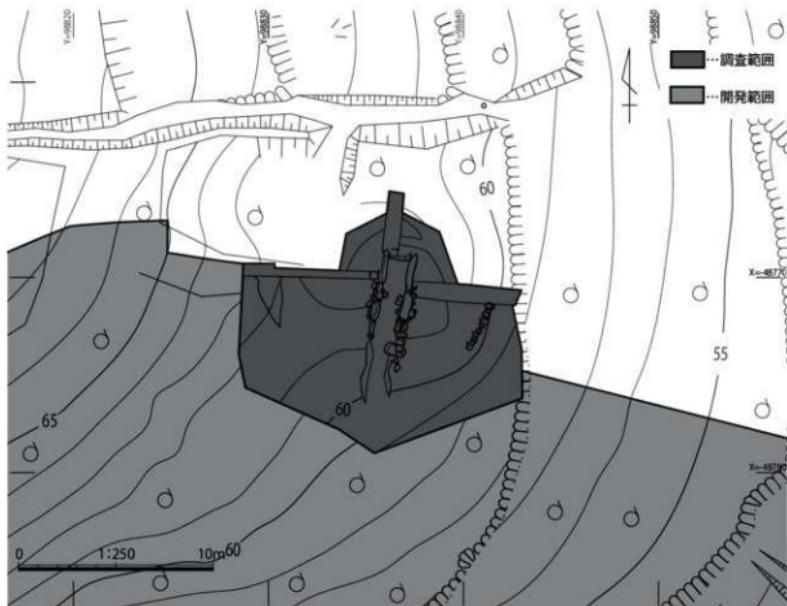
日から緊急調査を行うこととなった。

- 平成 27 年 12 月 7 日 福浦法田岬 2 号墳として土地所有者から遺跡発見の通知。
- 〃 12 月 8 日 島根県教育委員会宛てに進達。緊急調査を実施する旨を協議。
- 〃 12 月 8 日 島根県教育委員会から発掘調査を実施するよう勧告。
- 〃 12 月 9 日 事業者に勧告事項を通知。
- 〃 12 月 9 日 埋蔵文化財本発掘調査依頼書の提出を受ける。
- 〃 12 月 10 日 埋蔵文化財発掘調査の通知を提出。

調査当初は盗掘を受けた箱式石棺を有する円墳との認識で調査に取り掛かったが、調査が進むにつれて横穴式石室であることが判明した。また、玄室・羨道部共に天井石が抜き取られ、盗掘を受けているものの、比較的主体部の保存状態は良く、圭頭大刀の一部や玉類、須恵器等の副葬品も出土した。

墳丘の北半分は工事予定地外になるため当初は調査の対象からは外していた。しかし、石室については一部が工事範囲外となるものの、道路の維持管理を行なうにあたり安全面から施工時に石室の石材を全て撤去する方針となつたため、調査範囲を北側へ拡張し、石室全てを調査対象とした。

現地発掘調査は平成 27 年 12 月 10 日より開始し、翌年の平成 28 年 2 月 26 日にまで調査は及んだ。最終的に調査面積は 122.32m<sup>2</sup>となり、35 日間の作業日数を要した。



第 4 図 開発範囲と調査範囲図 (1 : 250)

## 第3章 墳丘の調査

### 第1節 墳丘の構造

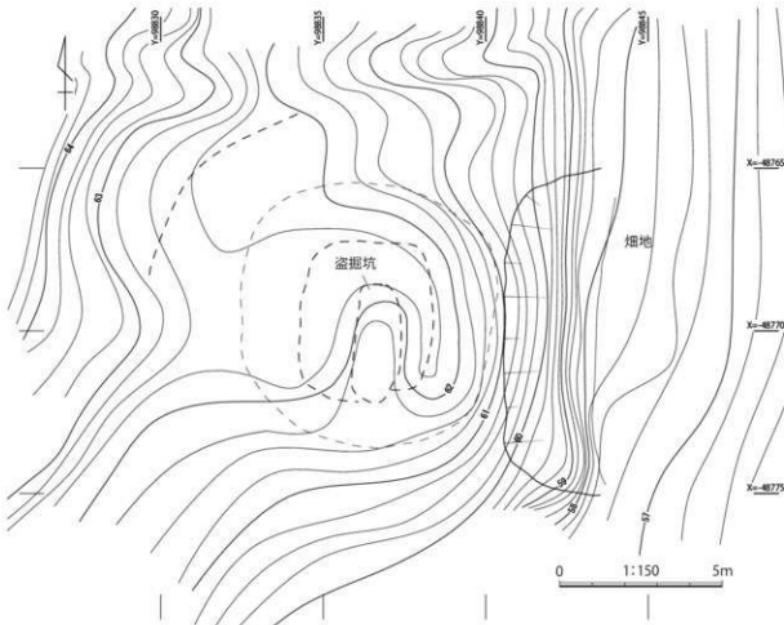
#### 1. 測量調査

福浦法田岬2号墳は南北に走る尾根筋から東へ下る斜面の比較的緩やかな地点に存在する。古墳発見時には、すでに道路工事が開始されていることもあって伐採が終わっていたが、以前は果樹園として利用されていた場所であった。

古墳発見当初から墳丘の高まりと、墳丘西側には区画溝と推測される落ち込みが見られた。斜面部に存在することからいわゆる山寄せの古墳と思われた。また、墳丘頂上部には盜掘坑と思われる窪みも見られ、主体部の残存状況は悪いものと予想していた。なお、調査開始時には法田岬1号墳と同様の箱式石棺を有する径10m前後の円墳を想定していた。

発掘調査を実施するに当たっては、事前に測量調査を行った。方位については、世界測地系に準拠した座標北を基準としている。墳丘測量は25cm間隔の等高線で測った。

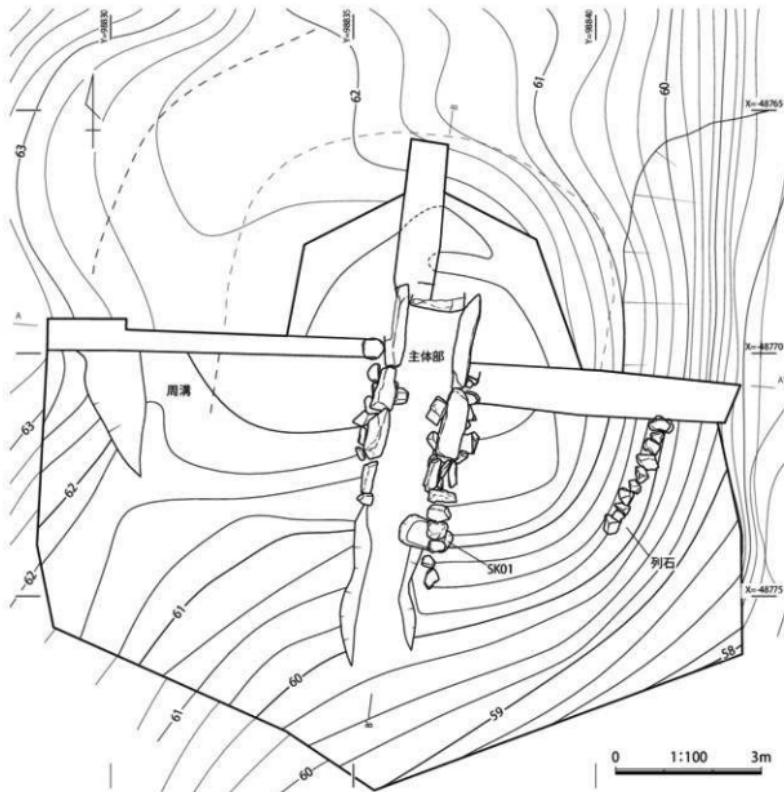
墳丘最頂部は標高62.25mであり、約1m程度の墳丘高を想定していた。ただし、墳丘頂部は盜掘のため幾分割平されているので、古墳築造当初の墳頂はさらに高かったものと推測する。



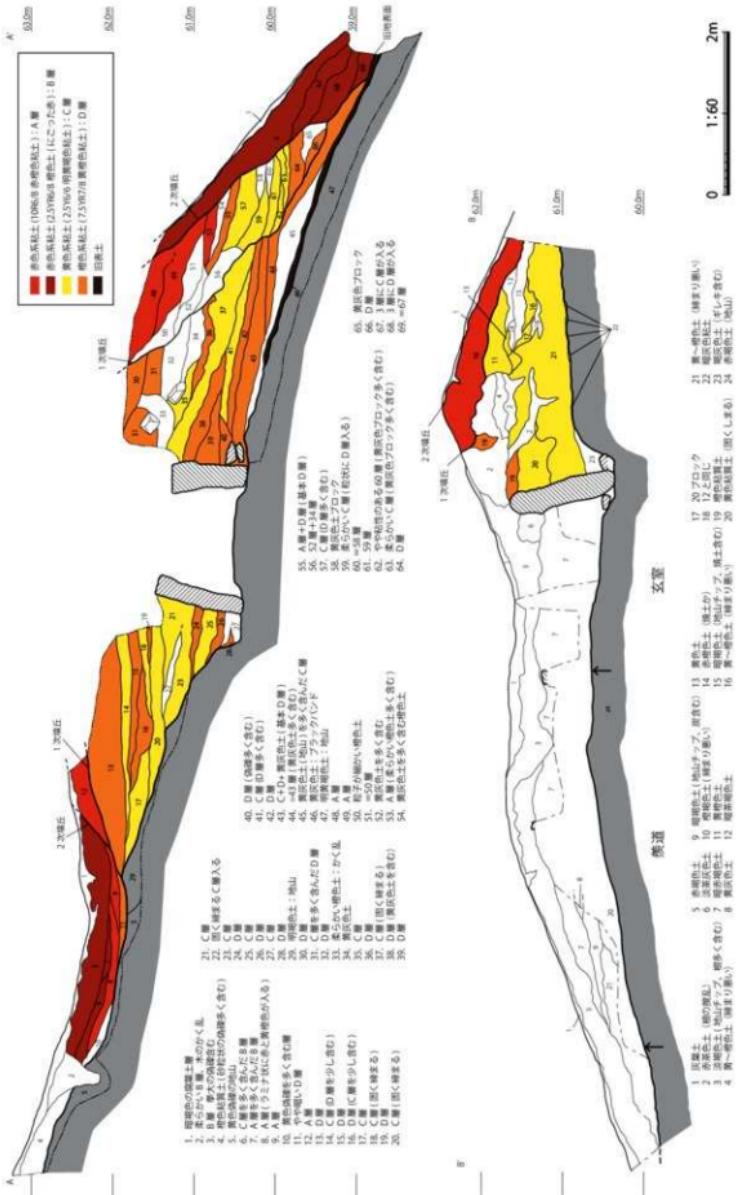
第5図 調査前墳丘測量図(1:150)

## 2. 調査の概要

調査はまず、調査区北端に沿った墳丘の東西方向軸を設定すると共に、主体部と想定される盜掘坑の状況から仮の南北軸を設定するところから始めた。地山面までトレーナーを掘って墳丘の構造について調査すると共に、玄室床面を捉えることを目的とした。調査が進むにつれ、玄室・羨道部の残存状況及び開口方向について判明すると、南北軸については微調整を行った。また、表土掘削が終了した時点で墳丘の測量調査を再度実施した。土層図はレベルを用いて手測りにより縮尺1/20で作成した。遺構の平面測量はトータルステーションを用い、その測量図と遺構を照合しながら平面図をおこし、レベルを記入した。また、遺物の取り上げについてもトータルステーションとレベルを併用した。調査の最終段階では盛土・主体部を構成する石材を撤去し、地山面まで掘削し、測量及び全体の写真撮影を実施した。



第6図 墳丘測量図及び遺構配置図(1:100)



第7図 塙丘断面図(1:60)

### 3. 盛土の構造

古墳は東へ向けて緩やかに下降する傾斜面を一部削平して平坦面を割り出し、盛土を施すことで作られている。段築ではなく、盛土の高さは東側墳裾から現存する墳頂部までは3.6mとなっている。墳丘の基本層序は下から地山・旧表土・1次墳丘・2次墳丘・表土に分かれる。

地山は周溝の西側肩部から墳丘中央部までは削り出されているが、墳丘東側では地山の上に旧表土と思われるブラックバンド(第46層)が残っている。また、墳丘西側は地山を段状に削り出し、主体部が存在する墳丘中央ではほぼ水平になるよう削平している。

1次墳丘は、墳丘西側は地山を削平した後に盛土を施すのに対して、東側は旧表土を残しつつ盛土を施している。盛土全体としては黄色系粘土と橙色系粘土を互層状に積み上げて構成している。また、1次墳丘盛土内では石室構築に伴うと推測される3つの盛土の段階が見て取れる。

第18・20・37層上面は他の盛土層に対して硬く締まっている。土層上面のレベルと主体部の位置関係から見て、玄室天井石の架構あるいは玄室側石の積み上げに関係した作業面と考えられる。

第41～42層上面では複数個の石材剥片を検出している。石の色調から玄室腰石と類似しているため、腰石の加工によって生じたものと推測される。この層の上面も石材の加工のために利用された作業面と捉えることができる。

第44・45層は、第43層より上層が玄室右側壁に擦り付くのに対して、主体部底の地山面と水平に合わせるようにして旧表土上に盛られているよう見える。このため、第44・45層は主体部構築に先立って広くテラス状の平坦面とし、構築時の作業面を確保するために盛られたものと解釈できる。

以上のように、同じ1次墳丘内でも主体部の構築段階に対応して盛土も段階的に施したようであり、複数の小段階に分けて理解することもできるようである。また、1次墳丘の土層立ち上がり具合から、石室天井石は1次墳丘完成時にはほぼ完全に埋まった状態であったと推測される。

2次墳丘については、1次墳丘では黄色系の粘土が多く用いられているのに対し、赤・橙色系の粘土で構築されているため、意図的に土を使い分けているようにも考えられる。推測の域を出ないが、赤い墳丘を意図していたのではないかとも思われる。

### 4. 周溝

墳丘西側では、東へ向けて下降する斜面と古墳を区画する南北に延びる周溝を検出している。周溝の底の標高は61.8m。地山まで削り出し、周溝東側は墳丘の盛土を施すことによって形成している。西側斜面の地山の傾斜変換点を周溝の西側肩部と考えると、深さは約0.9mとなる。周溝は北側の調査区外にまで延びるので全容は把握できていないが、調査区北側から南へ向けて約3m延び、これより南へ向けては不明瞭となる。周溝は主に墳丘から流出した盛土で埋まっていたが、溝底には1次墳丘から流失した黄色系の粘土(11層)が薄く堆積していた。これは1次墳丘築造後、2次墳丘が築造されるまでの間、1次墳丘盛土が流出する程度の期間が空いていたことを示すものと考えられる。

### 5. 列石

墳丘東側裾部では列石を検出している。列石は北東から南西、つまり羨道部入口方向へ主体部主軸に対して斜めに2.5mほど直線状に延びる。北側の調査区外にまで続くと思われるが、墳丘西側及び

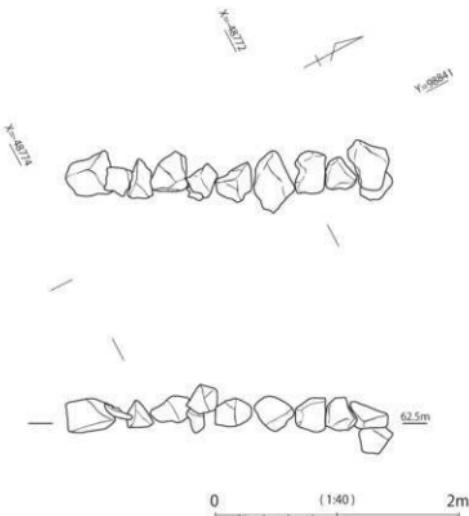
南側には存在せず、全周することはない。列石を構成する石は直径0.2～0.4 m前後の自然石を使用する。列石は原則1段であり、部分的に2段積まれている箇所が存在する。検出状況から列石は1次墳丘(44層)上、2次墳丘内に存在し、2次墳丘完成時には墳丘盛土によって埋められているようであり、いわば、墳丘内列石とも呼べるものとなる。

このため列石は1次墳丘盛土の流出を防護するために置かれたものとも考えられる。であるならば、列石が傾斜面の低い方に当たる東側にのみ存在することも理解できる。あるいは1次墳丘完成時に置かれた外表施設とも、1次墳丘築造時において盛土の範囲を区画したものとも推測できる。

## 6. 墳形と規模

墳丘東側は後世に削平を受けていたため、墳裾が明確ではないが、東西の土層断面から古墳の東西規模は少なくとも9.3 m以上あったと推測できる。

墳形は墳裾の全容が把握できなかったことから断定は避けたいが、測量調査から方墳としての角の存在が確認できず、円形となることから南北



第8図 列石平面・立面図(1:40)



写真1 列石と主体部(東から)

に長い梢円形の円墳と考える。列石が主体部主軸に対し斜めに羨道部入口へ向けて延びることも円墳と判断する理由の一つであるが、列石は完成した古墳の裾を表したものではないので墳形の判断材料としては注意を要すると思われる。

## 第4章 埋葬施設の調査

### 第1節 主体部の概要

福浦法田岬2号墳の内部主体は両袖式の横穴式石室である。主体部の構造は玄室と羨道部に分かれ、羨道部からは断面U字状の深い地山の掘り込みが続く。左右の側壁の長さは非対称で左側壁に対して右側壁が長い。ただし、地山の掘り込みを含めると逆に左側壁が長くなる。また、玄室及び玄門部付近では1段目に腰石と呼べる比較的大型の石材を設置した後に自然石・割石を積むのに対して羨道部付近になると腰石は無く、自然石を積むだけの簡素な構造に変化する。

左右側石の裏側には栗石と呼べる径0.3m前後の自然石を検出している。栗石は主に玄門部から羨道部へ向けて特に密集して見られる。また、東側よりも西側が密に置かれ、並べ方も丁寧な印象を受ける。羨道部に栗石が集中しておかれるのは、側石の構造の変化によるものとも思われる。つまり、羨道部では自然石を積むだけの簡素な構造となるため、栗石による補強をし、倒壊もしくは崩落を防ぐための措置であると推測できる。また、天井石を架構するためにも羨道部側石の補強の意味合いも持っていることも考えられる。

玄室は墳丘の中心からやや西寄りに位置し、羨道はほぼ真南(S-8°-W)、海に面した方向に開口する。

調査時には盗掘により玄室・羨道部の天井石が失われた状態であったが、側壁から基底部まではある程度良好な状態で残っていた。また、遺物についてもある程度まとまった量が残っているため、出土地点も埋葬当時の状況を残しているものと推測される。一方で羨道閉塞部については攪乱のため土層堆積状況が判別し難い状況であり、ここから追葬回数を解明することはできなかった。

### 第2節 玄室の調査

#### 第1項 玄室の構造

玄室の内法は奥行2.0m、幅は奥壁側1.38m、玄門側1.17mとなり、玄門側がやや狭いものの、平面形は主軸方向に長い縱長の長方形となる。

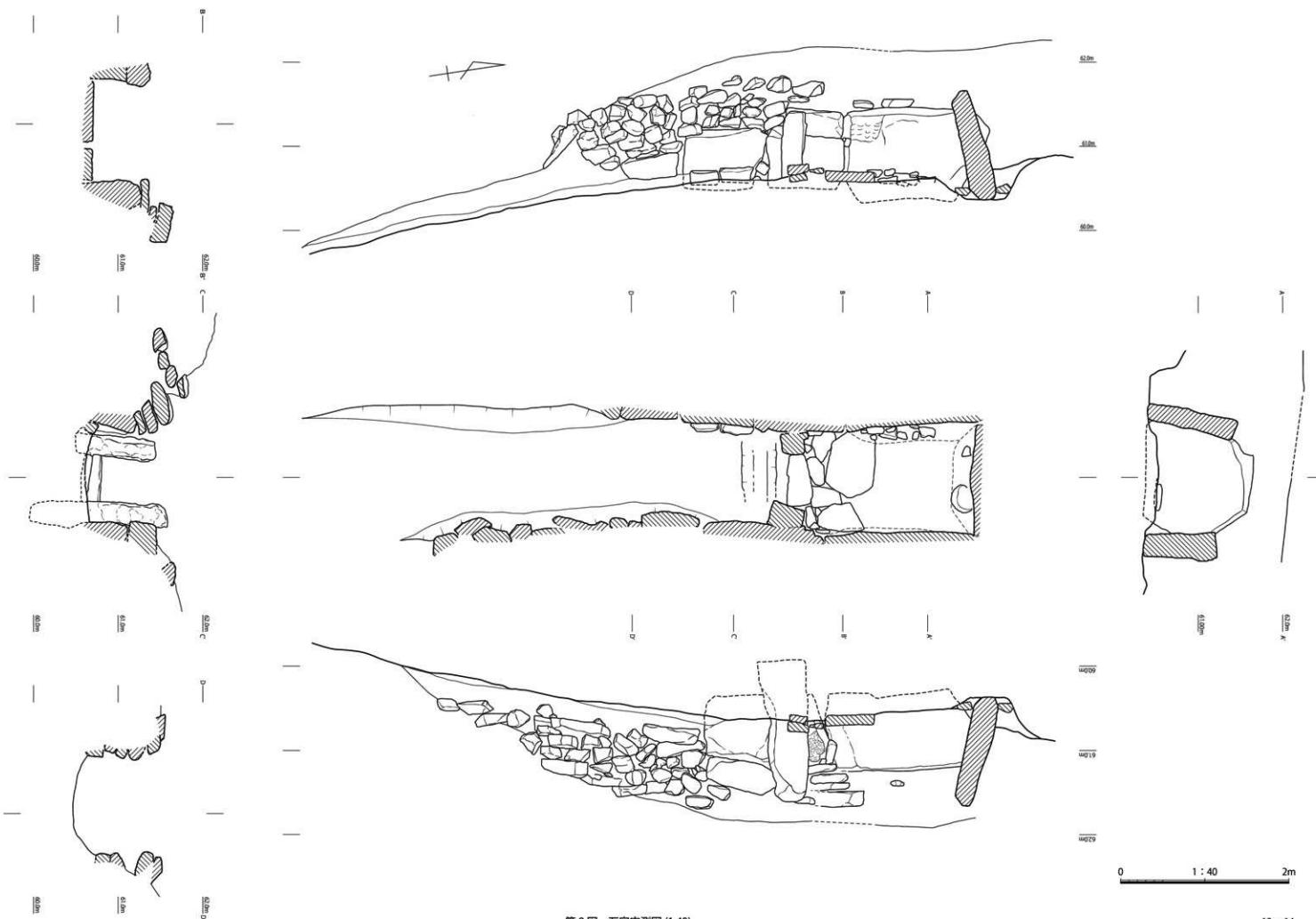
奥壁は1枚の切石で、床面からの高さ95cm、厚さ30cmであり、やや内側に傾く。形状は上辺角を打ち欠いた台形に近い六角形とも言える形状をしている。

玄室の高さは、天井石が失われているためこの奥壁の上にさらに石が積まれていたかはわからず、奥壁の高さである0.95m以上としか言えない。

天井部の形状についても不明であるが、奥壁・側石の傾きから推察すると、天井部付近は内傾し、断面は奥壁の形状に近い台形状であったものと考えられる。

玄室側石は奥壁を挟み込む形で据えてあり、現存する高さは右側石で0.55m、左側石で0.7mとなる。玄室床面に設置された側石は上段に積まれた石と比較して明らかに大きい腰石が並べられている。この上に少なくとも奥壁の高さまで2~3段以上の扁平な割石が積まれていたものと推測する。

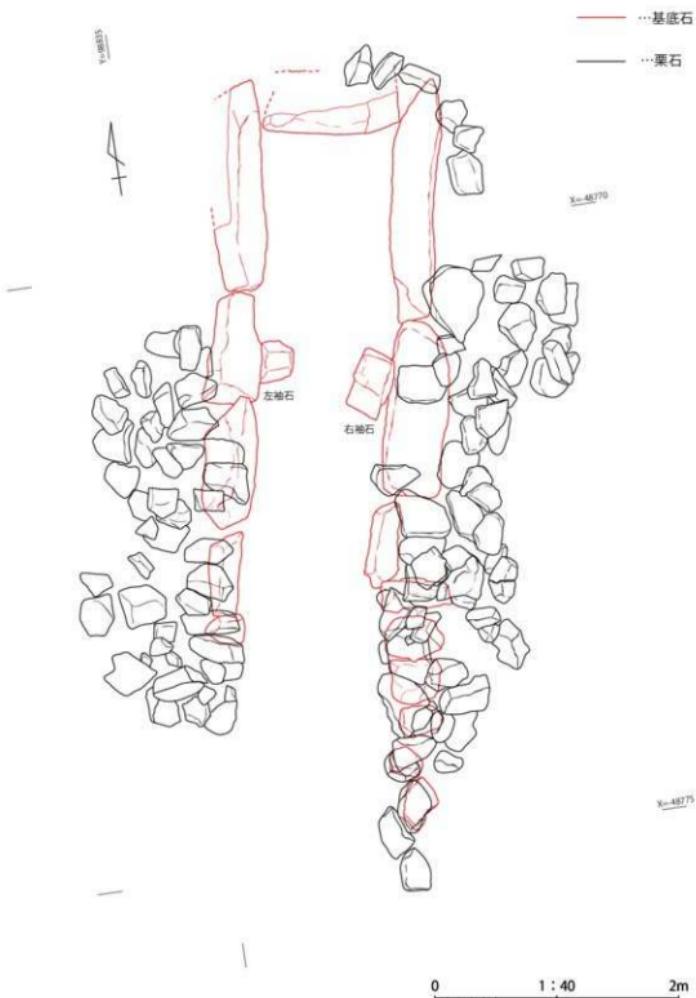
玄室床には板状の緑色凝灰岩が敷かれている。ただし、床石は玄門側に限られ、奥壁では検出していない。床石の大きさは差渡し0.4m~0.8m、厚さはいずれも0.1~0.2m。不規則な形状の板石



第9図 石室実測図(1:40)

を組み合わせるように敷き詰めている。詳細は後述するが、玄門前に床石と同様な形状の石が積まれていることから、本来は床石は玄室床全面に敷かれていたものと推測される。

なお、玄室内には石棺は無く、木片や鉄釘などの木棺を想起させるものも出土していない。



第10図 主体部基底石及び栗石検出状況図(1:40)

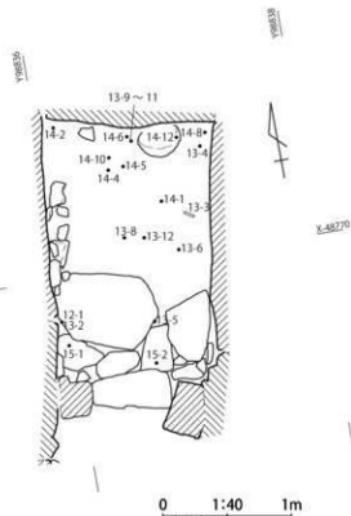
## 第2項 出土遺物

玄室内からは大刀片 10 点、耳環 2 点、玉類 10 点、須恵器 3 点の遺物が出土している。盗掘を受けていたため、散逸してしまったものとも思われるが、遺物はある程度は良好に残っていたと言える。また、出土地点も埋葬当時の場所から動いていることが予想される。前述のとおり、床石が剥がされていることから、既に追葬時に一度、動いてしまったものと思われる。一方で、遺物の出土地点には偏りがあり、ある程度埋葬当時の状況を反映しているものとも考えられる。玉類や耳環が玄室奥壁側に集中して出土していることから、頭位は玄室奥壁側、つまり北側であったことが推測される。また、主頭大刀の把頭が左玄門付近から出土しているが、同一個体と思われる刀身片は玄室中央から北寄りに集中する。

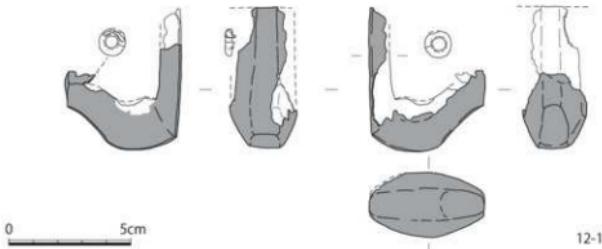
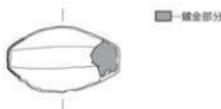
### 1. 主頭大刀 (第 12・13 図)

金銅装主頭大刀が破片の状態で玄室内に散乱して出土した。柄頭と鋒が 1 点ずつ出土していることから、1 本の大刀が破碎されたものと推測される。後述するが、同一個体と思われる大刀片が玄門部付近でも 3 点見つかっている。

第 12 図の 12-1 は柄頭とハト目金具である。左袖石付近の左側壁に沿った位置から出土している。覆輪状に被せて、内郭・外郭の構成を取る。頂部の腹側と背側に高低差があり、頂部張り出し



第 11 図 玄室遺物出土状況図 (1:40)



第 12 図 主頭大刀柄頭実測図 (1:2)



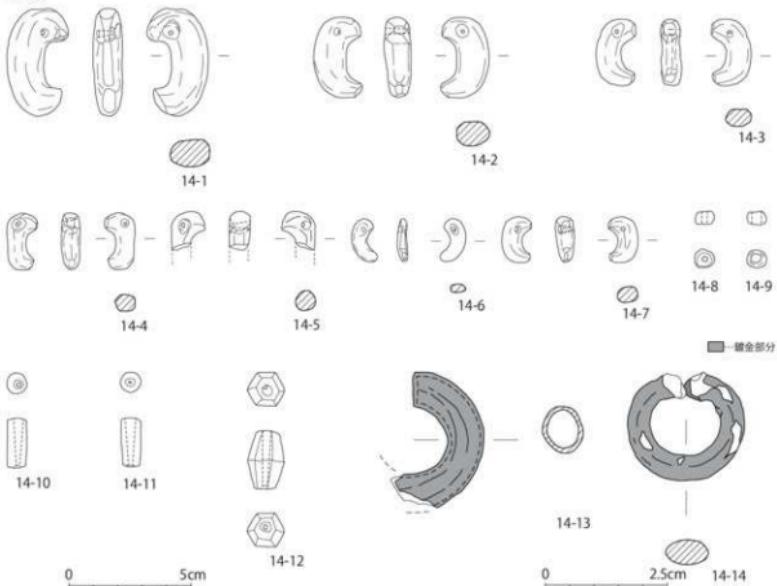
第13図 圭頭大刀刀身片(1:2)

## 2. 装身具(第14図)

装身具として玉類と金環が出土した。いずれも玄室内で出土しているものの、床石が抜かれている場所から出土しているため、副葬当時の位置からは動いているものと推測される。

玉類の種類としては、勾玉7点、ガラス玉2点、管玉2点、切子玉1点の計12点が出土した。

14-1～5はメノウ製勾玉である。いずれも片面穿孔で、反対側に割れ円錐の痕が残る。胴部は間延びし、「コ」の字形に近い形状である。14-1は最大高が4.4cmで今回出土した勾玉の中では最大となる。色は不透明な濃い橙色で一部白みがになっている。14-2は1に次ぐ大きさで、色は1と同様に濃い橙色であるが、全体的に白味を帯びる部分が見られる。14-3はやや赤味を帯びた透明に近い色であり、部分的に橙色を帯びる。14-4は全体に赤味がかった透明で、部分的に白色を帯びる。穿孔は頭の中心からやや背側に寄る。割れ円錐の部分を特に研磨したようであり、頭から割れ円錐を中心にして背側に斜面が付く。14-5は勾玉の頭部のみ出土したが、頭部の大きさから完形品は14-3と同程度の大きさになると推測する。色は透明度の低い無色である。14-6は滑石製勾玉である。形状は扁平でメノウ製勾玉に比して小型で「C」字形に近い。穿孔方法は玉に厚みがないため明確ではないが、片面に割れ円錐のような跡が見られることから、片面穿孔と思われる。割れ円錐痕が残る側を強く研磨しているようであり、胴から頭に向けてやや薄くなっている。14-7は水晶製の勾玉である。滑石製勾玉と同程度の大きさであるが、形状はメノウ製勾玉に近い「コ」の字形となる。片面穿孔である。



第14図 玄室出土装身具実測図(玉類1:2、耳環1:1)

14-8・9はガラス玉である。8は濃い藍色で透明度は低い。側面は丸みを帯び、上下面是完全に平坦となる。14-9は劣化が著しく、全体的に白くなってしまっており、表面は凹凸が激しい。孔径は14-8が2mmに対して14-9は4mmであり、ガラスの材質と共に製作方法に違いが見られる。

14-10・11は管玉である。14-10は碧玉製で濃い緑色、14-11は透明度の低い水晶製で、穿孔方法はどちらも片面穿孔である。2つの管玉は材質の違いこそあれ、法量に大きな違いは認められない。

14-12は水晶製の切子玉である。透明度はあまり高くはないが、穿孔が明確に透けて見える。穿孔方法は片面穿孔で円錐状剥離痕が残る。形状は六角錐台を底面で併せた形状である。

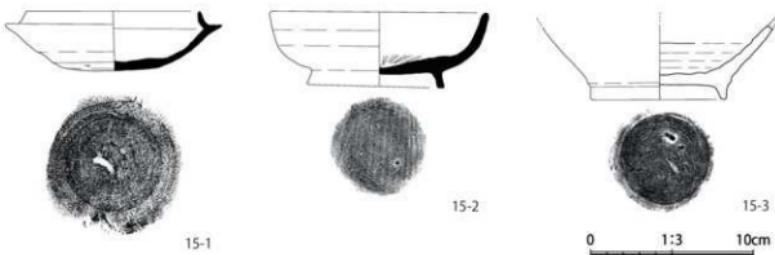
14-13・14は耳環である。玄室内トレンチ掘削中に出土した。出土位置は図示していないが、状況から見て玉類と同様、奥壁付近から出土した。14-13は半分が欠損した状態であり、地金は銅であるが表面は錫が著しく、鍍金されていたかは不明である。断面は上下に長い楕円形で中空。表面に若干の凹凸が見られることから、上下平面ずつ成形したものと接合したものと推測される。14-14は同じく銅製の耳環だが、鍍金がほぼ残り、一部緑青が浮き出ている。断面は楕円形で中実。突合せ部の隙間はほとんど無い。14-13と14-14は大きさ・構造共に異なることから2対の耳環の片方ずつとして見るべきと思われる。これ以外に耳環は見つかっていないが、別々の被葬者のものとしておきたい。

### 3. 須恵器・土師器(第15図)

玄室内床面からはほぼ完形品の須恵器が玄門付近の床石上に置かれた状態で出土している。

15-1は蓋環の身である。外面に回転ヘラ削り痕が残り、自然釉が付着している。また、内面に対してやや白っぽく、風化したような印象を受ける。大谷編年出雲4期と思われる。15-2は高台付の深い壺である。底部は静止糸切り後にナデている。また、内側底部には放射状に暗文が施されている。本来、土師器に施される暗文が須恵器にも施されていることは、技法の共有の点で注目される。大谷編年出雲7・8期と思われる。この2つの資料には時期差が認められるため、15-2の資料の示す年代まで追跡もしくは祭祀が行われていたものと推測される。

この他、玄室内を掘削中に土師器の壺15-3が出土している。底部には回転糸切り痕が残り、高台が付く。古代末ごろと思われる。玄室内に流れ込んだ攪乱土から出土しているため、天井石抜取りの時期を示す資料の可能性がある。



第15図 玄室出土須恵器・土師器(1:3)

### 第3節 玄門部の調査

#### 第1項 玄門部の構造

玄門部は両袖式であり、立柱状の袖石は玄室・羨道側石に組み込まれず両側壁に接する形で立てられている。右袖石は左袖石よりも14cm高く、左袖石には少なくとも1石以上積まれていたものと思われる。また、右袖石は全長168cmあるうちの半分近くが据え付け穴の中に埋められていたうえ、根固め石を坑内に設置して立てられている。これに対して左袖石は全長90cmで15cmほど埋められていたにすぎず、裏込めの石もなく、簡素な設置の仕方となっている。

両袖石の間の床面には樞石が置かれ、玄室と羨道が明確に分けられている。この樞石は2石を重ねている。

袖石の上に樞石が架構してあったかについては、天井石と共に失われており不明である。このため、玄室・玄門部の上部構造については明らかでない。

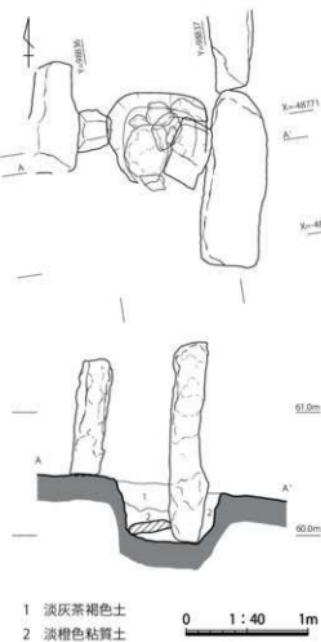
以上のことから、玄門の幅は55cm、高さは樞石から右袖石上端までを計測すると最低でも80cmあったと推測される。

今回の調査では玄門部で明確な閉塞は確認できていない。ただし、玄門前には溝状の地山の窪みを確認したことから、木製の閉塞装置が存在していたことが考えられる。<sup>(1)</sup>また、玄門部手前では石材が

集積している状態で検出している。石材の中には玄室床面に敷かれた板状の緑色凝灰岩と同様のものもある。おそらくはこの集石が追葬時の閉塞に当たるものとも思われる。

集石の下からは完形品に近い須恵器が何点か出土している。集石と下の遺物の間には検出状況から考えて<sup>(2)</sup>時期差が認められる。遺物の詳細については後述するが、おそらくは初葬時に玄門前で祭祀的な行為が行われたものと推測される。

集石下の遺物の内、樞石の前からは小型の壺(18-3)が1点出土しており、玄室内で出土した破片と接合する。つまり、この小型の壺は、本来玄室内に副葬されていたものが、挿き出されたと推測される。ただし、前述の初葬時の祭祀に伴うと考えられる須恵器の1群とは出土地点が離れているので、小型の壺は追葬時の集石による閉塞の際に樞石前に移されたと考えている。また、副葬品を挿き出す行為は、玄室床石を剥いで閉塞石に転用していることと合わせて、何らかの祭祀を窺わせる行為と考えられる。<sup>(2)</sup>

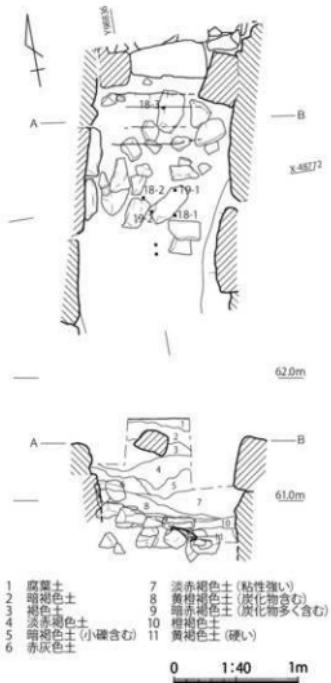


第16図 玄門石平面図・断面図(1:40)

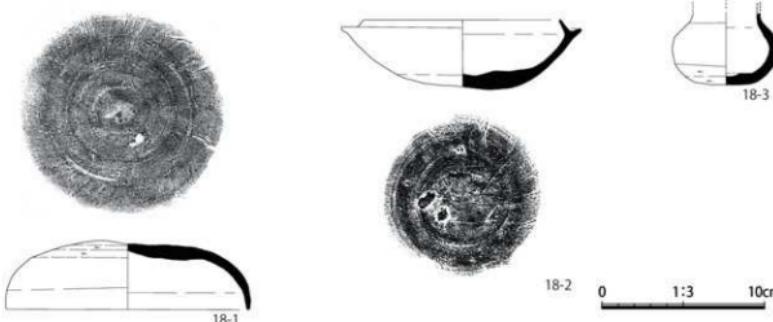
## 第2項 出土遺物(第18・19図)

遺物の多くは玄門部前に積まれた集石の下から出土している。いずれも状態は良好でほぼ完形品に近い状態である。18-1は蓋環の蓋である。肩部に沈線ではなく、天井部と体部との境は不明瞭であるが、頂部に当たる範囲には丁寧なヘラ削りが広く施される。口径は15cmと比較的大型である。大谷編年出雲3期に相当するものと思われる。ただ、出雲地方の須恵器とは全体的な形状に違いが認められることから撒入品の可能性がある。18-2は蓋環の身だが、18-1とは別セットである。底部にはヘラ削りの痕跡が認められるが、不明瞭であり、ナデ消しているように見える。大谷編年出雲4期である。18-3は小型の壺である。口縁部は不明であるが、胴部下半にはヘラ削りが施される。19-1は壺である。体部と頸部に沈線を施すが、文様は見られない。大谷編年の出雲4・5期と思われる。19-2は提瓶である。口縁部を欠くが、直立する単純な筒状の頸部と推測する。正面には別個体の須恵器片が溶着する。頸部を中心に自然釉が付着し、頸部から体部にかけて灰被りが認められる。把手は形骸化し、ボタン状となっている。大谷編年出雲4期に相当するものと思われる。

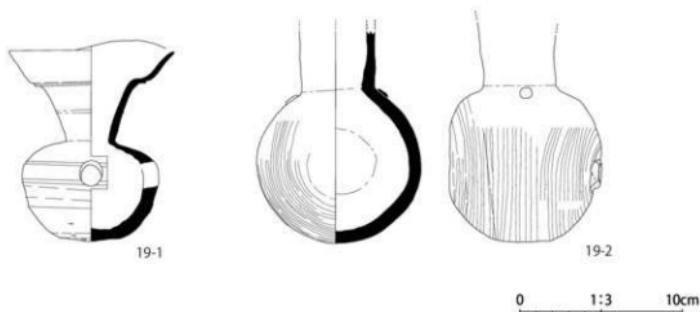
なお、18-3は玄室内から接合する破片が1片出土している。また、18-3は他の須恵器とはやや離れた地点から出土しているため、他の須恵器とは置かれた時期に差があるようと思われる。



第17図 玄門部遺物出土状況図(1:40)



第18図 玄門部出土遺物①(1:3)



第19図 玄門部出土遺物②

## 第4節 美道部の調査

### 第1項 美道部の構造

美道の左右側壁は玄室側壁から直線状に延び、玄門部に柱石状の袖石を立てることにより玄室と美道部を区分けしている。美道部の長さは玄門前から計測すると左壁は2.85m、右壁は3.95mとなり、左右で長さが異なる。現存する左側壁の最大高は1.2m、右側壁は1.0m。幅は約1.1m前後で平面形は長方形となる。玄室と同様、美道部でも天井石が抜き取られていたため上部構造及び高さは不明であるが、断面形は側壁がほぼ垂直に立ち上がる。

側壁の基本構造は、玄門部側と閉塞部側で異なる。玄門部付近では玄室と同様、最下段に腰石を置き、腰石上に差し渡し40cm前後の割石を積んでいるが、閉塞部付近になると腰石と呼べる大型の石材は使用せず、同じような自然石を積み上げただけの単純な構造となる。目地が通っていないうえ、腰石上にもう1段同程度の石材を積む箇所もあれば、方形に近い自然石・割石の上に長方形の石材を横に置いて積む箇所もあり、規則性に乏しい。

床面は玄室であったような床石は無く、断面は地山を浅く掘り窪めた緩いU字状をなし、美道入り口へ向けて緩やかに下降する。

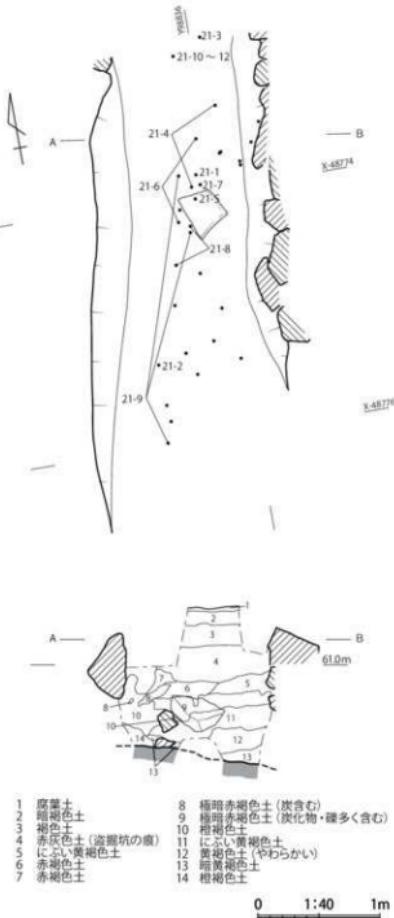
美道部の左右側壁から入り口へ向けては積石がなく、美道部から続く地山を掘り窪めた緩いU字の墓道状の造構に変わり、最後には不明瞭となって消える。左右側壁の基底石から計測すると、左側は3.6mまで延びるのに対し、右側は0.4m程度しか伸びない。これは、左側壁は地山を掘り窪めることにより側壁の延長したことに対し、右側壁は山の斜面が下降する側であり、続けて側石を積む必要性があったことに起因するためとも推測される。

美道部の入り口及び閉塞施設については今回の調査では明らかにはできなかった。なお、玄門から約2.9m南へ離れた地点から板石を1枚検出し、その下から完形に近い須恵器が出土している。検出状況からなんらかの意味を持つように見えるのだが、床面から0.3~0.4m浮いた状態であり、擾乱を受けた土層とも推測される9層中にあることから、下から出土した遺物との関連性は薄いものと考える。

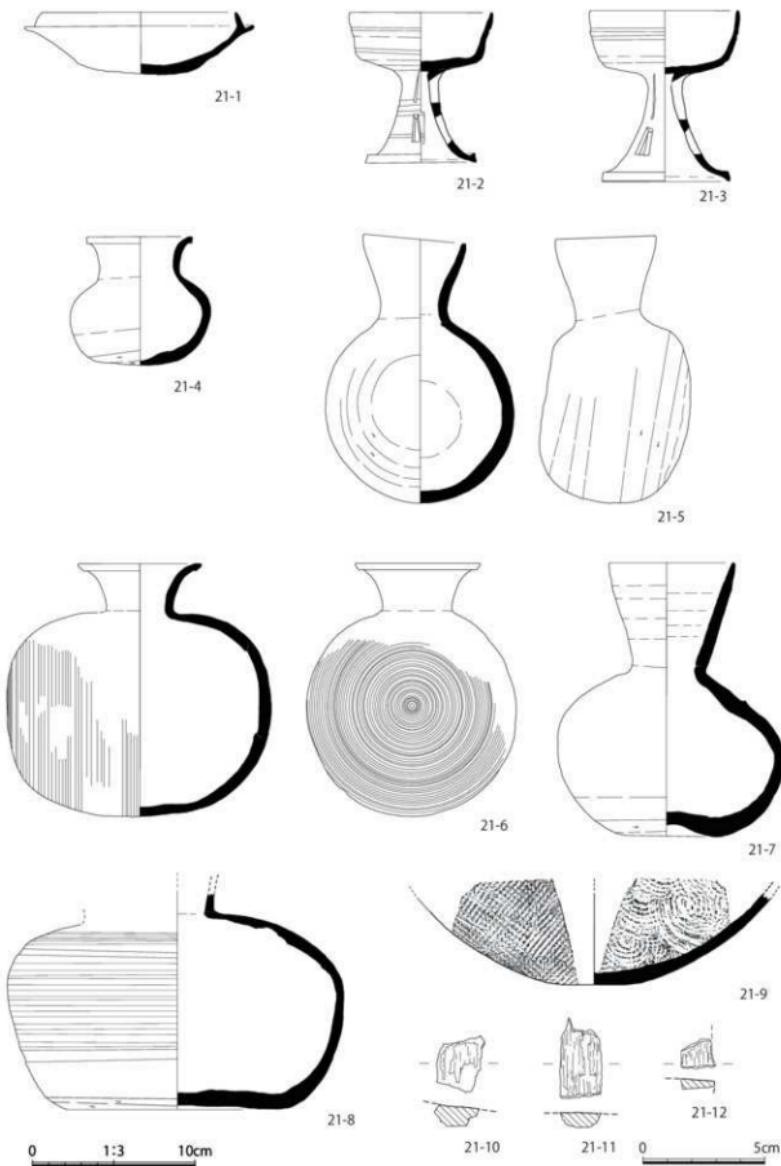
## 第2項 出土遺物(第21図)

羨道部からは計31点の須恵器が出土している。約半数近くは壺・甕片であるが、完形品に近い個体も多い。出土分布状況としては、羨道部で検出した板石の下付近に集中する傾向にあり、完形品に近い状態の個体もその地点に集中する。一方、壺・甕片は板石よりも墓道状の遺構に向けて散在するようであり、まとまりに欠ける。

21-1は壺身である。A5あるいはA6型に相当すると思われ、出雲4期と考えられる。21-2は長脚無蓋高壺である。2段2方に透かしが入るが、上段の透かしは切れ目となり、壺部の底部にまで及ぶ。A6型に相当し、出雲4・5期と思われる。この個体は板石付近から入口へ向けて約1m離れた地点から出土している。21-3も長脚無蓋高壺である。2段3方に透かしが入るが脚部は短小化し、上段の透かしは切れ目を入れるだけのものに簡略化されている。出雲6期と考えられる。21-4は器高7.9cm、胴部最大径8.7cmの小型の直口壺である。底部に回転ヘラ削りを施す。口縁部の破片が胴部から約0.7m玄室側へ離れて出土している。21-5は提瓶である。ほぼ完全形で板石の下から出土した。口縁部は筒状で頸部は外側して立ち上がり、端部はやや内湾する。肩部に把手がなく、背面・腹面共に回転ヘラ削りを施す。21-6は横瓶である。口縁部から頸部にかけて一部欠けた状態で出土した。胴部には同心円状のカキ目を施した後、回転ナデを施す。口縁部は段をなしてやや肥厚する。21-7は長頸瓶と思われるが、頸部が片側に寄って付くことと、肩部付近にわずかだが瘤状の突起が見られることから平瓶の可能性がある。頸部は筒状に近く外側へ向けて直線状に立ち上がり、胴部下半には回転ヘラ削りを施す。片側の肩部が窪み、ここにボタン状の突起が見られる。また、底部は内側に向けて大きく窪む。21-8は平瓶である。口縁部から頸部にかけては欠損しているが、体部はほぼ完形に近い状態で残っている。把手を持たないタイプであり、胴部外面はカキ目を、底部に



第20図 羨道部遺物出土状況図



第21図 羨道部出土須恵器・鉄製品(須恵器1:3 鉄器1:2)

は回転ヘラ削りを施す。体部には焼成時に別個体の須恵器が重ねられていたため、直径7.5cmの円形の痕が残る。21-9は甕の底部に当たる。これ以外にも甕の胴部に当たる破片が散在しているが、口縁部は一片も出土していない。破片の量と色調から1個体分と考えられる。

21-10～12は鉄製品である。いずれも木質が付着し、元の鉄製品から剥離したものと思われる。今回の調査では主頭大刀以外に鉄製品は見られず、21-12は大刀の茎の一部である可能性もあることから、玄室出土の主頭大刀の一部であるとも考えられる。ただし、出土地点は床面より高い位置から見つかっており、追葬時に玄室内から挿き出された可能性が考えられる。

#### 註

- (1) 玄門前から検出した集石のうち、出土遺物18-3の上から検出した石はここで言う木製の閉塞装置の押さえの石であった可能性を考えている。
- (2) 中村1号墳の調査成果(出雲市教育委員会 2012『中村1号墳』)によると、「再生阻止儀礼」として埋葬終了後の進入による副葬品の毀損・ばら撒き、石棺の毀損行為が確認されている。本古墳でも同様な儀礼が行われていた可能性を指摘しておきたい。

## 第5章 基底部の調査

### 第1節 基底部の構造

福浦法田岬2号墳の主体部は埴丘構造でも触れたように、地山面を掘り窪め平坦面を形成した上に構築されている。主体部東側は地山まで掘らず、旧表土を残しているが、一方で主体部西側は地山が段状に掘られている。

埴丘西側に存在する周溝も地山を切る形で掘削されている。一方で、埴丘盛り土は周溝の東側地山掘り込み肩部から盛られているように見えるため、盛土を施す以前の、主体部の地山掘削とほぼ同時期に掘られたのではないかと推測する。

基底部の石材を除去すると、石材に沿った掘方を検出している。玄室・羨道部の掘方を掘削して平面形を決めた後に各基底石を設置している。また、掘方は腰石と呼べる大型の基底石の下のみにあり、右側壁先端部にあるような比較的小型の自然石を基底石として設置された場所では地山平坦面に直接基底石を設置している。さらに、掘方の幅は、基底石の厚さが0.2～0.3mであるのに対し、1.0～1.3mと広めに掘られていることから、根固めの石を設置することを前提にして掘削されているようである。実際、掘方の深さは0.1～0.3m程度と浅く、基底石が自立・安定するほど深くはない。また、玄室内側の根固めの石は内傾する奥石・側石の倒壊を防ぐためか、より丁寧に設置している。一方、羨道部では主体部内側よりも外側に根固めの石を密に置いている。

右袖石は玄門部の調査でも触れたが、深さ0.5mの土坑を掘り、根固めの石で固定して倒壊を防ぐことにより立柱状に設置されている。また、奥壁は両側石に挟み込まれる構造上、側石よりも先行して設置されていると見て間違いない。このため、玄門袖石と奥壁を設置することにより玄室規模を確定した後に両側石を設置したと考えられる。

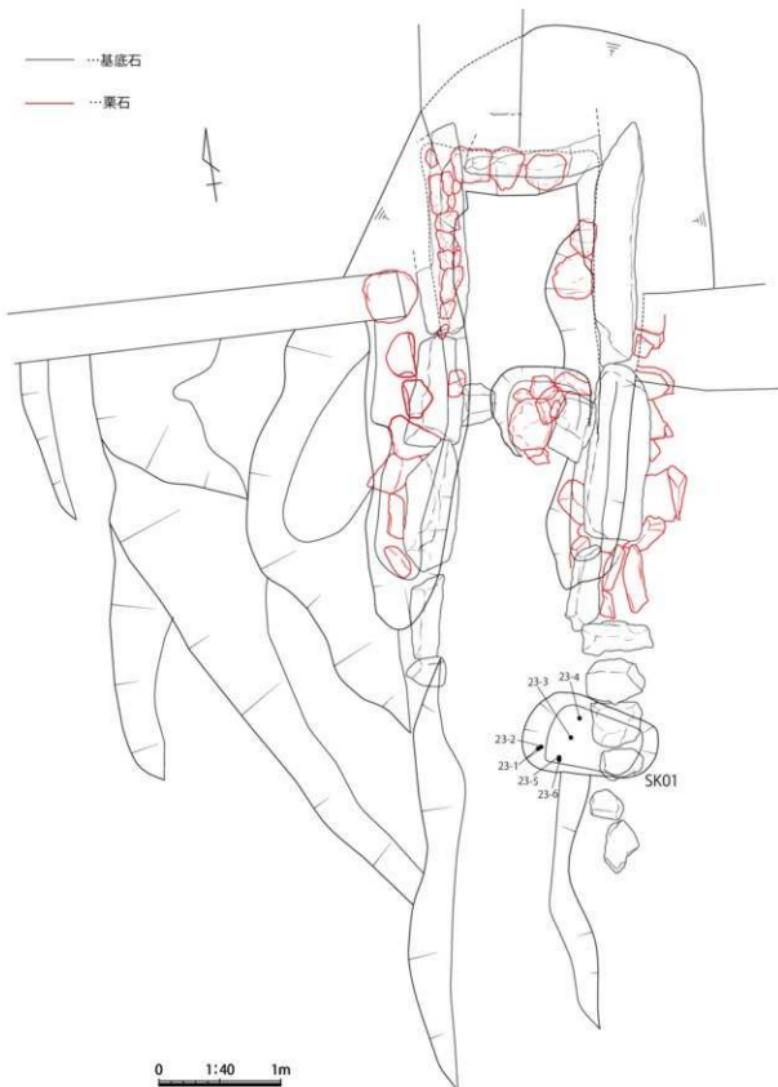
### 第2節 SK01の調査

右側壁の除去後に地山面を精査したところ、隅丸長方形の土坑(SK01)を1基検出している。SK01は羨道右側壁の下から検出しているため、羨道部構築に先行して掘られたものである。<sup>(1)</sup> SK01の規模は長径105cm、短径55cm、深さ32cmである。SK01からは須恵器蓋環が6点が、いずれも土坑内の西寄りの地点から出土している。このうち、2セットは蓋と身を合わせた状態で置かれている。なお、1セットは蓋を逆にして置かれ、身はやや離れた場所から出土している。

SK01の性格は不明であるが、深さ32cmしかなく、遺物の配置状況から埋葬する余地が少ないため、埋葬施設などは考えにくい。むしろ、土器や有機物を埋納することを目的としたものと考えるのが自然かと思われる。よって、ここでは古墳築造前に行われた何らかの祭祀に関連したものとしておきたい。

#### SK01出土遺物(第23図)

23-1・2、23-5・6は蓋と身を重ねた状態で出土している。ただし、23-5・6は身に対して蓋の径がやや大きいため、元々別セットの蓋環を合わせたものの可能性もある。また、23-3・4は胎土や色



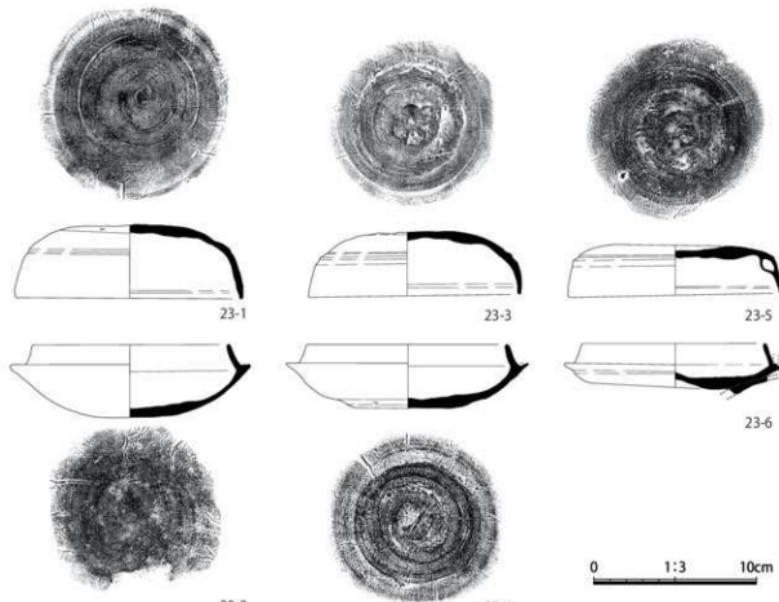
第22図 主体部掘形平面図とSK01遺物出土位置(1:40)

調及び口径に違いが見られ、出土状況と相まって別セットの蓋と身である。

23-1は天井部に回転ヘラ削りを施し、肩部に2条の沈線を施す。口縁内側には1条の浅い沈線を

めぐらす。23-2は底部に回転ヘラ削りを施している痕跡があるが、回転ナデを施したためか不明瞭である。23-1・2は焼成が悪く、色調は土師器に近い。また、蓋を下にして身を被せる形で出土している。23-3は天井部に回転ヘラ削りを施し、肩部に2条の沈線を施す。口縁内側には1条の沈線をめぐらす。23-4は底部に回転ヘラ削りを施す。23-5は天井部に回転ヘラ削り、肩部に2条の沈線を施し、口縁内側に1条の沈線をめぐらす。口径が12.6cmであり、23-1が13.5cm、23-3が14cmと比較してやや小振りとなり、器高も低い。また、内側には何らかの有機物が付着した痕跡だろうか、不定形な茶褐色のシミが付着する。23-6には別個体の須恵器片が溶着している。

遺物の時期は23-1～4が大谷編年出雲3期、23-5・6は出雲4期の古い段階に位置付けられると考える。



第23図 SK01出土須恵器(1:3)

## 註

- (1) 羨道部の石材を設置する場所に土坑を掘り込んでいる点については疑問が残るため、土坑の掘削と羨道部の構築には時期差を考える必要性もある。この点については第6章第2節において詳しく触れる。

## 第6章 総括

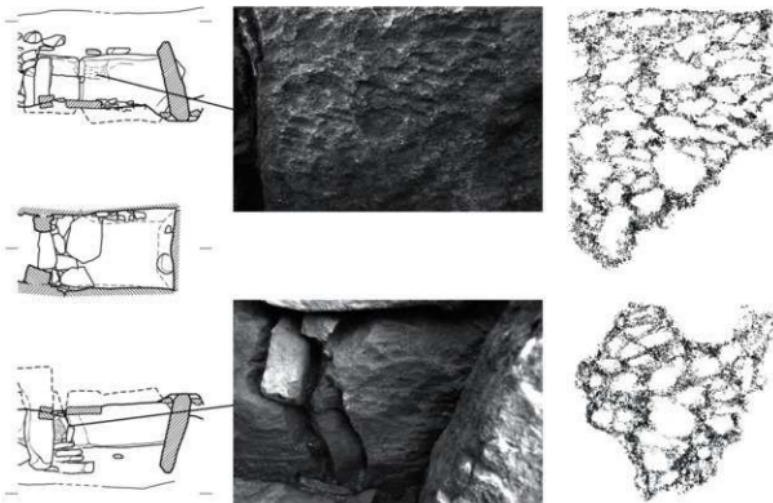
福浦法田岬2号墳は島根半島東部において初めて本格的な発掘調査が実施された古墳となった。調査の結果から同古墳は径9.3m以上の円墳であり、内部主体は両袖式の横穴式石室を有する後期古墳であることが判明した。築造時期は玄室内と玄門部の出土遺物の様相から大谷編年出雲4期であると考えられる。

ここでは発掘調査から判明した様々な要素から福浦法田岬2号墳について評価・位置付けについて検討し、まとめてみたい。

### 第1節 福浦法田岬2号墳主体部に使用された石材について

福浦法田岬2号墳の主体部の特徴の1つとして、比較的大型の石材を基底石とした腰石の存在が挙げられる。まず、板状の長方形に加工した切石を地山面に掘り込んで設置し、その上に割石・自然石を積み上げて構築している。腰石の主体部内側に当たる面にはチョウナによる幅5cm前後の加工痕が見られ、内面を平面に加工した痕跡が残る。反対に玄室外側には石材を割った後の削り痕は見られず、場所によって精粗を分けているようである。

羨道部で使用されている石材の中には付近の海岸でも見られる角の取れた自然石や穿孔性の海洋生物によるものと思われる穴を開いた石材がある。また、同古墳周辺では石室と同様の石材が露出している場所もあり、主体部を構築する石材は遠隔地から運ばれた石ではなく、福浦周辺で採取可能な石材を用いたと考えられる。



第24図 玄室石材表面に残る加工痕(拓本 1:8)

## 第2節 福浦法田峠2号墳の築造過程

今回の調査では、主に土層断面から墳丘・石室の築造過程についてある程度明らかにすることができます。ここでは得られた成果をまとめ、築造の過程の一説を示すと共に、調査では明らかにできなかつた点について、残された課題として触れてみたい。

### 第1項 墳丘・石室の築造過程

#### ①地山の掘削

まず、緩斜面を平坦に削平することから古墳の築造がはじまる。墳丘西側は地山を墳丘として利用するためか深くは掘らず、あらかじめ決めていたと思われる主体部を設置する部分で急激に深く掘り込むように見える。また墳丘東側では掘削は主体部周辺までしか行われず、旧地表面(46層)を残している。

なお、周溝は1次・2次墳丘盛土を切ってはいないため、この時点での掘削し、墳形及び規模を決めていると推測する。

#### ②SK01 祭祀

あらかじめ地山の掘削が進んだところで主体部の構築場所を決め、地山を平坦に加工する。その後、主体部・墳丘構築に先立ってSK01の掘削と須恵器の埋納をし、何らかの祭祀的な行為が行われたものと推測する。

#### ③右袖石の建立・奥壁の設置

平坦に加工した地山面に土坑・溝を掘って袖石・奥壁及び腰石の設置場所を決め、右袖石と奥壁を設置して主体部の平面形と玄室規模を決定する。

#### ④腰石の設置

主体部掘方に腰石を設置する。設置と同時に腰石の傾きを決め、根固めの石で補強した後、掘方を埋めて玄室・羨道の基底石の設置を終える。

#### ⑤1次墳丘構築・石室の完成

主体部を覆うように1次墳丘の構築を開始する。土層断面及び各盛土層の状態から、1次墳丘の構築には段階を踏んで行われたことが推測できる。

41層上面とほぼ同じレベルで腰石の石材と同じ石材の剥片が散乱し、右腰石の巣石を設置するために41層を掘り込んだ層(40層)が認められることから、41層上面が作業面として機能していた段階が推測できる。

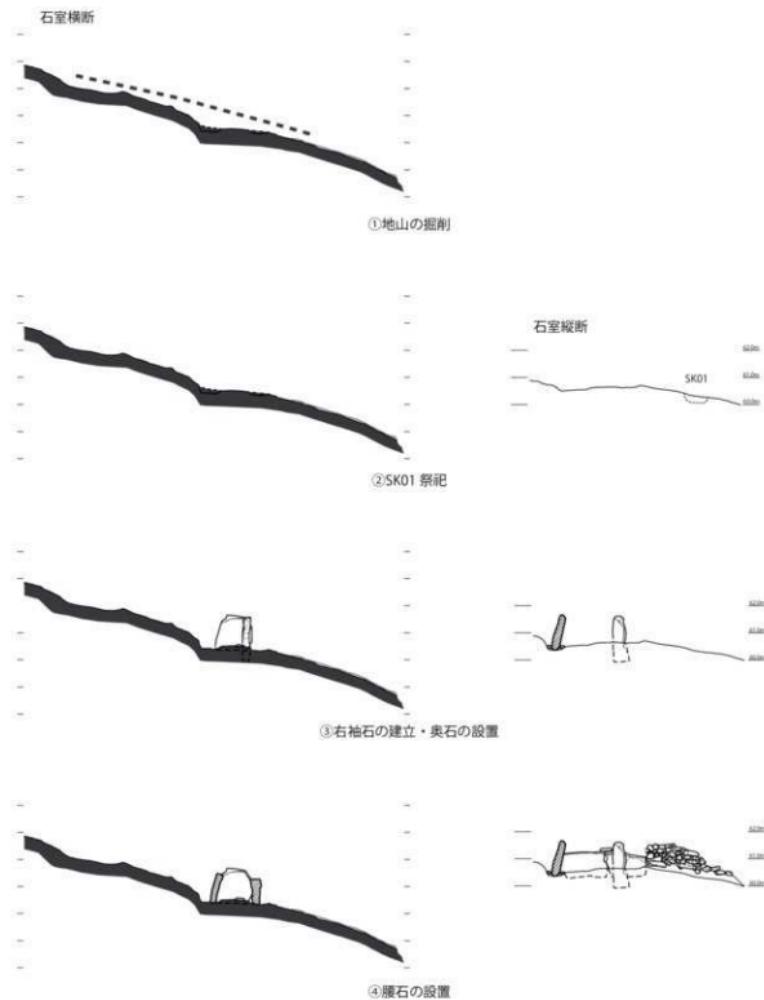
また、主体部から西側の18・20層上面、東側の37層上面は固く締まっていたため、腰石上の側壁構築もしくは天井石の設置のための作業面と考えられる。

さらに、45層は上層には黄・褐色の粘土が用いられたのに対し、地山層と同じ土を多く含み、主体部底部の地山層に擦りつき、平坦な面を形成することから、45層上面も作業面と捉えることもできる。あるいは45層は1次墳丘構築に先立って、③・④を行う際の作業面として事前に盛られた層と考えることが可能かもしれない。

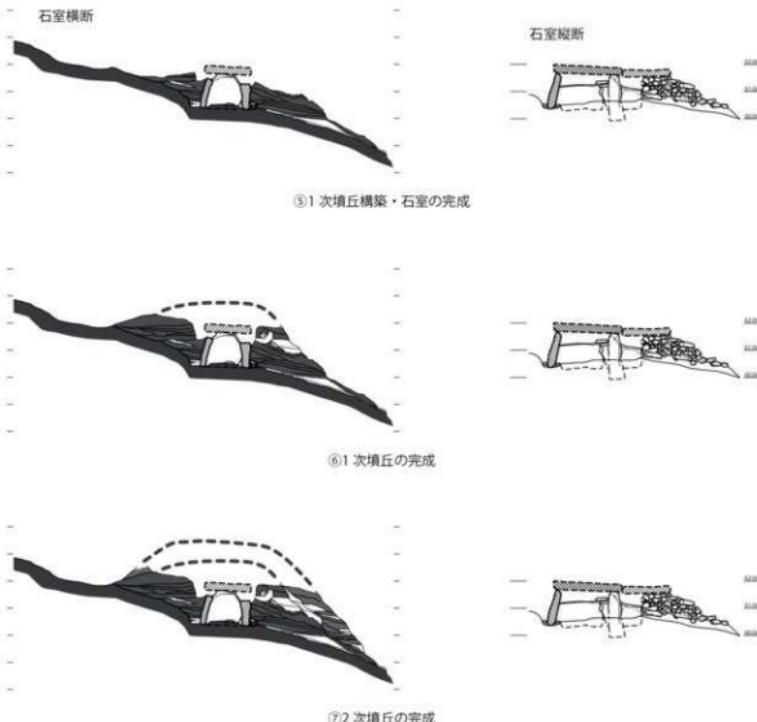
## ⑥ 1次墳丘の完成

主体部天井石を運搬・架構した後、主体部全体を覆うように盛土を施し、1次墳丘が完成する。

墳丘西側周溝の底には1次墳丘の盛土が流れできた層(11層)が存在することから、1次墳丘構築後に露出した状態のまま、しばらくの期間経過したものと思われる。



第25図 古墳の築造過程①(1:180)



第26図 古墳の築造過程②(1:180)

### ⑦2次墳丘の完成

1次墳丘を完全に覆うように2次墳丘を完成させる。2次墳丘の東側下層は1次墳丘と同様に黄・橙色を水平かつ互層状に盛るが、上層になると赤色の土を用い、1層当たりの厚みが増す。上層に対して下層を丁寧に盛土を施す行為は、墳丘東側は斜面の下降方向に当たるため、盛土が流失することを恐れての措置とも推測される。

### 第2項 SK01と古墳築造に伴う祭祀行為

羨道右側石下から検出したSK01は、意図的に据え置かれた形で出土した蓋環の存在から古墳に伴う祭祀の存在を想起させる遺構である。SK01は検出状況から羨道右側石設置よりも先だって掘削されたものであることは確実である。ただし、古墳構築段階のどの時点での土坑が掘削されたかについては2つの可能性が考えられる。

1つ目としては、①地山の掘削・整地後に掘削された可能性である。これは前項で示した築造過程の②に当たり、主体部・墳丘構築直前に祭祀が行われたことを示す考え方で、SK01の検出状況から

考えて最も自然な構築過程の流れとなる。

2つ目としては、玄室・玄門部には側壁に腰石を用いるのに対して羨道部の途中からは自然石を積むだけとなる構造の違いから、羨道部を2つの構築段階に分けた上で、羨道部構築前にSKO1が掘られた考えである。つまり、④腰石の設置において、羨道部先端は未完成のままで⑥1次墳丘の完成まで行い、続いてSKO1の掘削→羨道部の完成→⑦2次墳丘の完成とする考え方である。この考え方だと、SKO1は玄室・玄門及び1次墳丘完成後の納棺における祭祀を窺わせるものとなる。

羨道の築造過程を2段階以上に分ける考えについては、土生田純之氏の論考が詳しい。<sup>(1)</sup> 1例として挙げると、山口県山口市の朝倉河内1号墳では羨道の途中で石材の積み方が異なっている箇所があり、この地点が墳丘内列石との接点に当たることから、羨道の築造段階に差があることを指摘している。こうした事例は長野県長野市にある大室23号墳など全国的にいくつか見られる。

また1次墳丘完成時の祭祀を窺わせる事例として、山口県下関市岩谷古墳の調査成果が挙げられる。同古墳では1次墳丘の北辺と南辺に須恵器の大甕が据えられ、2次墳丘完成時には埋没することになる事例がある。<sup>(2)</sup> 出雲地方でも向山1号墳では石棺式石室と1次墳丘がほぼ完成した時点でその上に子持壺を樹立した祭祀の存在を窺わせる報告や、岡田薬師古墳でも墳丘盛土の構築過程において須恵器を置いて何らかの祭祀が行われたと推測できる報告もあり、本古墳でも羨道の築造過程の時期差や1次墳丘完成後の祭祀の可能性を考えても良いように思う。

ただし、今回の調査では羨道部の構築を2段階に分けたことを実証する成果ではなく、墳丘内列石も羨道側壁に接していないうえ、平面図から見ると列石の延長線上には羨道の先端が接点となるよう見えることなどから、ここではあくまでも可能性を指摘するに留めたい。

### 第3節 出土須恵器から見た福浦法田峠2号墳

主体部から出土した遺物について図27・28にまとめてみた。前述のとおり出土地点に偏りがあると同時に出土レベルにも高低差が認められる。また、出土遺物の時期にもある程度の傾向があり、出土地点と関連するようにも思われる。また、今回の調査では土層断面からは追葬の回数については明らかにできなかったが、遺物の検討を通じて追葬とその時期について検討する。

#### 第1項 須恵器の出土地点から見た初葬時期と追葬・進入時期

図27は主体部内の須恵器の出土地点を示した図である。大別するとSKO1、玄室、玄門前、羨道の4つに分けられる。出土した須恵器の多くは完形品であり、出土状況から考えて設置当初の状況をそのまま示すものと思われる。ただ、別地点から出土した破片が接合する例もあり、人為的に動かされた状況が疑われる個体もある。続いて、図28は出土遺物の検出地点の高さを表した図である。これを見ると地山直上出土のものと、床面から浮いて出土しているものとの違いが認められる。ここから、追葬や祭祀等による主体部への進入時期が読み解けるようと思われるため検証する。ただし、主体部への進入が追葬によるものなのか祭祀のみを行うためかは断定できない。その違いを読み解くのは困難があるので、ここでは主体部への進入は一括して追葬としておきたい。

### ①初葬

古墳建造に伴う祭祀を窺わせるSK01からは大谷編年出雲3・4期古相の須恵器が出土している。本古墳で出土した須恵器の中では最も古い時期を示す資料であるが、前節で触れたように埋葬時ではなく、古墳の建造が行われた時期を示すものと考えられる。一方で、玄門前からは出雲3期の蓋坏18-1が出土しているのだが、18-2や19-1・2は出雲4期の新しい段階の時期と考えられる。出土状況を見ると玄室への埋葬時に行われた玄門前の供献を窺わせる状況から、4期新相の時期に古墳の建造及び初葬が行われたものと推測する。なお、同じく玄門部から出土した18-3については後述するが、出土地点が離れており、初葬時とは別の時期に混入したものと考える。

なお、玄門前に浅い溝状の窪みを検出したことから木製の閉塞装置が存在するものと考えている。また、玄門前的小壙（18-3）上から検出した石はこの木製の閉塞装置を抑えるための石であったと思われる。この後に行われる追葬の際には木製の閉塞装置は取り除かれ、抑えの石だけが残ったと考えている。

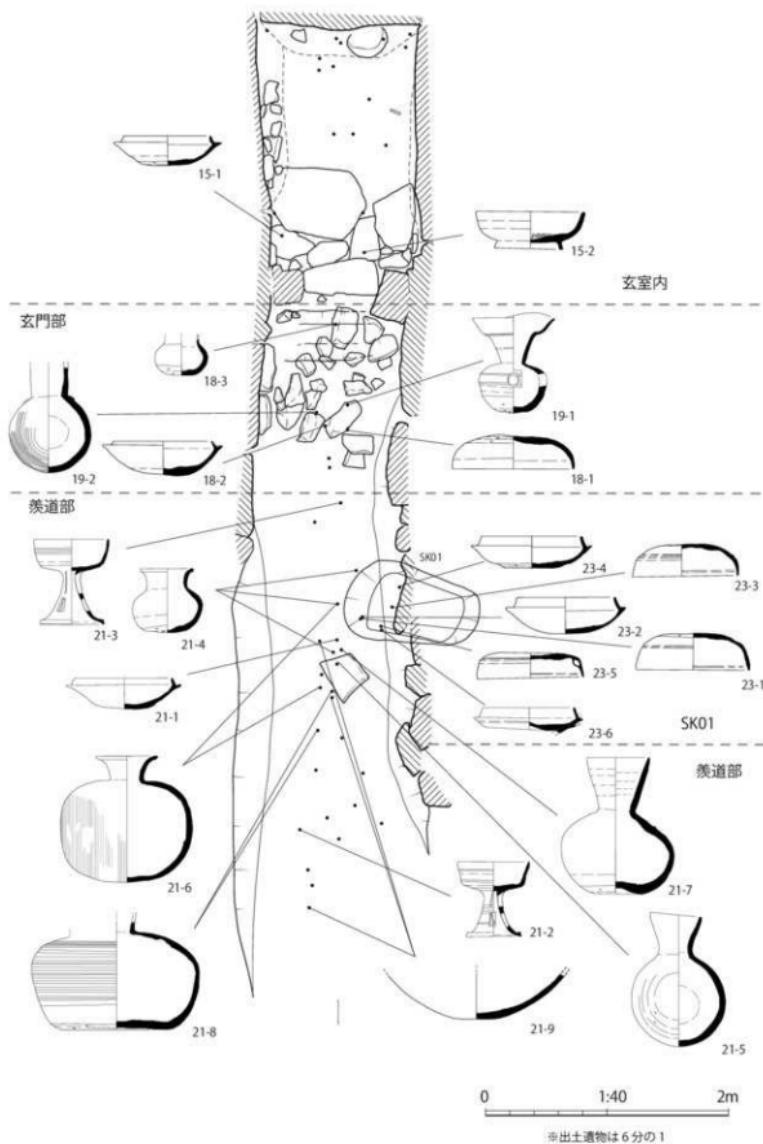
### ②追葬

漢道部から出土した須恵器に出雲5・6期の時期に相当する1群が認められることから、この時期に追葬が行われたと考えた。出土遺物の時期にある程度の幅があるため、複数回の追葬の可能性も考えられる。しかし、確証を得られるだけの証拠はないので、追葬が行われた回数までは明示しないこととしたい。

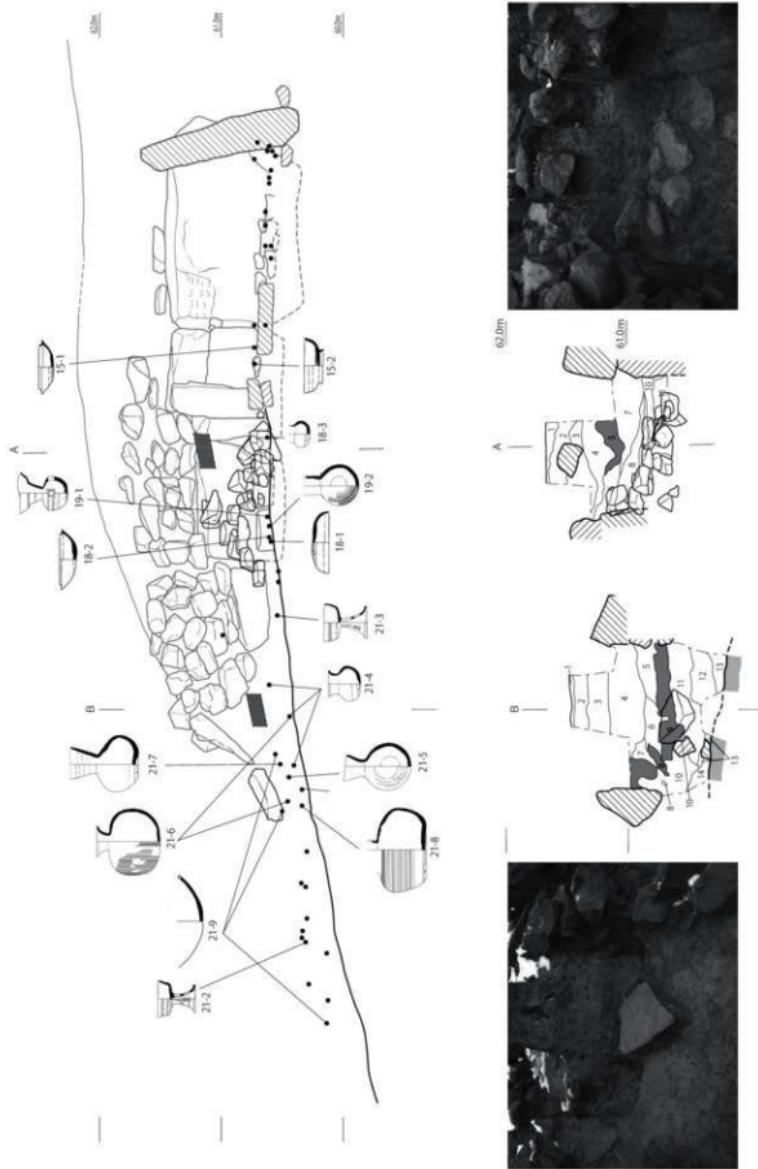
玄門前から検出した集石は追葬後に置かれた閉塞と捉えている。この集石の中には玄室床面に敷かれた板状の石と同じ石材も存在する。おそらくは追葬時に玄室奥壁付近の床石の一部が剥ぎ取られ、玄門前に積まれたものと思われる。また、玄門前から出土した18-3の破片が玄室内から出土している。これは本来玄室内に副葬品としておかれていた18-3が追葬時に床石と共に玄門前に移されたことの証拠となり得ると思われる。ただし、集石は左側壁に偏るうえに本来存在していただろうと思われる天井石までは届いていないことから、閉塞装置とするには疑問点が残る。ここでは、この後の最終進入時に閉塞装置が一部撤去されたことによるものと理解している。

### ③最終進入

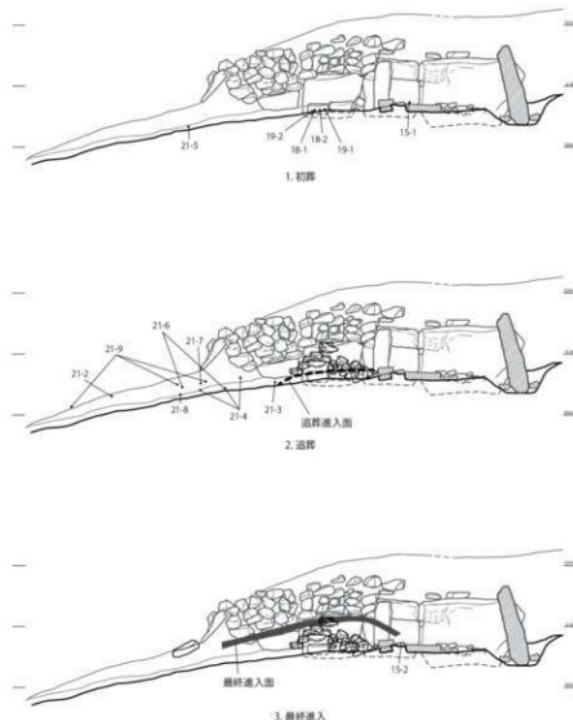
玄室内から出雲7・8期の15-2が床石上に置かれた形で出土している。これ以降の時期を示す遺物が玄室・漢道部から出土していないことから、この時期を最終の玄室内進入とした。おそらく、この時期の進入は追葬ではなく、祖先確認の儀式などの祭祀行為のための进入ではないかと考えている。玄門前の集石上の位置から褐色の土層を検出しておらず、この土層は漢道部で検出した板石付近の土層断面からも確認できる。この2つの土層は対応するものと考えられるので、漢道入り口から玄室内へ続く土層と思われる。おそらくはこの褐色の土層が最終進入によって掘削された土層に当たると思われる。なお、圭頭大刀片と思われる21-10～12は検出高から見てこの時に玄室内から持ち出され、遺棄されたものと考える。また、漢道部から見つかった板石もこの層から検出している。調査当時は完形品の須恵器の1群上から見つかっていたことから、何らかの意味を持つ石と考えていたが、前述のとおり最終進入に伴う土層から検出しているため、直接的な関係性は乏しいと思われる。



第27図 主体部遺物出土状況図



第28図 主体部遺物出土状況見通し図



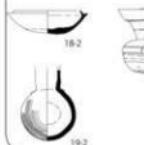
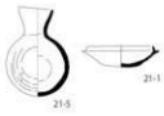
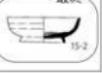
第29図 主体部進入回数模式図

#### ④ 盗掘による進入

調査時には玄室・羨道部の天井石が抜かれているため、後世において盗掘による進入があったことは間違いないと思われる。玄室覆土中からは11世紀ごろの土師器が出土していることから、この時期にはすでに盗掘を受けていたものと考える。なお、玄門前から玄室床石の一部が抜かれて置かれていたが、この床石だけでは玄室床面全てを覆うことは不可能であるため、盗掘時にも玄室床石は抜き取られたものと思われる。

以上、遺物の出土地点と時期から初葬及び主体部への進入時期について考察してきた。その結果をまとめたものが表1である。ただ、これはあくまで須恵器の編年をもとに、遺物の出土状況から主体部への進入時期を推測しているため、実際はさらに複数回の主体部への進入も考慮に入れなければならない。しかしながらこれ以上のことについて言及するには根拠に乏しいため、この表をもってここでの検討成果としたい。

表1 出土遺物と主体部進入時期

	SK01	玄門部	羨道部	玄室内
出雲3期				初葬
古				
出雲4期				
新				
出雲5期				追葬
出雲6期				
出雲7・8期頃				最終 

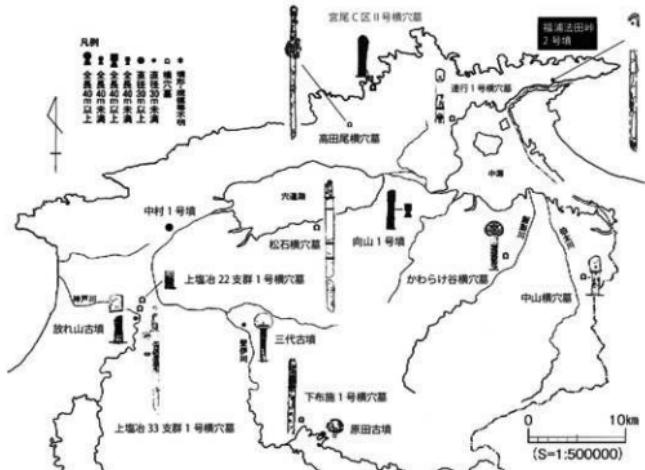
## 第4節 圭頭大刀から見た福浦法田岬2号墳の位置付け

福浦法田岬2号墳からは圭頭大刀が出土している。出雲地域では墳墓から出土した装飾付大刀としてはこれで43例目となる。本古墳から出土した大刀は破片となった状態であり、鞘などの形態はほとんど不明である。しかし、幸いにも把頭は残っていたため、この形態から考察を進めてみたい。

本古墳出土の圭頭大刀は、把頭が覆輪状で頂部から腹側近くのカーブが緩やかであることが特徴となる。菊池芳朗氏の分類によると、C1類2式に相当すると思われる。また、圭頭大刀は時期的にはTK43型式期を含みつつTK209～TK217型式期を中心とした須恵器と共に伴るものと考えられている。本古墳は出土した須恵器から大谷編年の出雲4期(TK43末～209)を初葬時期と見ているため、大刀と古墳の年代観に大きな矛盾はない。

出雲地域における古墳時代後期の装飾付大刀の分布に関しては松尾氏の論考に詳しい<sup>(6)</sup>。そこでは、装飾付大刀の分布を出雲地方東部と西部に分けたうえで、I段階(TK43型式期)とII段階(TK209～TK217型式期)の2段階に分けて考察している。II段階の時期は横穴墓被葬者への装飾付大刀佩用及び地理的な拡大としたうえで島根半島では圭頭大刀の出土が目立つとしている。この論考以後に発見された高田尾横穴墓の圭頭大刀を含め、本古墳で出土した圭頭大刀は松尾氏の論考を補完する出土例となるように思える。これまで連行1号横穴(松江市邑生町)で出土した圭頭大刀の出土例が島根半島では最も東に位置していたが、本古墳の出土例により美保関町福浦まで拡大したことになる。

装飾付大刀は中央氏族と地方首長との関係に基づき配布され、副葬された被葬者の階層を示すとされるのが一般的である。しかしながら、本古墳は墳丘規模からは周辺地域の他の古墳と比較して卓越した存在とはなりえない。にもかかわらず、本古墳の被葬者が装飾付大刀を佩用する首長であったことは、墳丘規模からは窺い知れない理由から、より上位の首長によってその存在が認められていたと



第30図 出雲地域における装飾付大刀分布図(II段階)(註6より一部加筆・修正 縮尺不同)

考えて良いかと思われる。その理由についてはここでは明らかにする術は無いのだが、本古墳が美保湾を見下ろす位置に立地することから、当時の島根半島南岸の東西を結ぶ海上交通に深く関与した首長であった可能性も考えられる。推測に過ぎるかもしれないが、こうした背景から本古墳の被葬者は装飾付大刀の佩用を認められた首長であったかもしれない。

## 第5節 島根半島東部における福浦法田岬2号墳の位置付け

ここでは福浦法田岬2号墳とその周辺地域である島根半島東部の後期古墳とを比較して半島東部における同古墳の位置付けについて触れる。なお、ここにおいて島根半島東部とは便宜上、『出雲国風土記』に記載のある郡・郷を単位とし、東部は島根郡の千鈞駅家と手染郷以東の地域とする。

島根半島東部では『出雲国風土記』に浜や浦の記載が残る地区ごとに複数の古墳もしくは古墳群を形成している。また、周辺地域と比較して横穴式石室が密集することが特徴として挙げられる地域でもある。横穴墓も4群26基が知られているが、広がりに欠く分布領域を示す。ただ、いずれの古墳も本格的な発掘調査は行われておらず、開口している石室や墳丘から出土している遺物からしか古墳の様相を窺い知ることはできない。

島根半島東部においてこのような現状であるが、『美保閑町誌』(以下『町誌』とする)をもとに、改めて半島東部における古墳時代後期の様相と横穴式石室の特徴について検討し、本古墳の位置付けを試みたい。

『町誌』では露出した横穴式石室や須恵器の出土から古墳時代後期における古墳は34基存在するとしている。今回調査した本古墳と、記述から同じく後期に位置すると思われる法田岬古墳(1号墳)を加え表にまとめてみた。竪穴系横口式石室を有する海崎1号墳が唯一方墳であるが、墳丘が判明しているものの全ては円墳であり、前方後円・後方墳は知られていない。規模も10m以下であり、島根半島東部では、墳形・墳丘からは、卓越した規模の広域的な支配領域を持つと想像でき得る首長墓が見られないのが特徴である。

今回見つかった本古墳も墳丘規模は墳端が明確ではないが、10m前後に収まることは間違いない。また、墳形も円墳であり、從来から知られている島根半島東部の古墳の範疇に収まる。なお、福浦法田岬2号墳から西の森山地区には天神山古墳や郷の坪古墳・西ノ谷古墳群があり、東の男鹿地区には男鹿古墳が存在し、いずれも同規模の古墳である。単純に墳丘規模から見ると、本古墳は他の地域に存在する首長と同列の、福浦を基盤とした首長像が思い浮かべられる。

統いて主体部の構造を見てみる。本古墳の主体部の特徴としては玄門部が両袖で玄門石は側石に組み込まれずに独立して立ち、基底部に比較的大型の腰石を置き、奥壁は両側石に挟み込まれることが特徴と言える。

『中村1号墳』では玄門部の構造から、I類：玄門部が両袖のもの、II類：玄門部が片袖のもの、III類：玄門部が削抜の石棺式石室と呼ばれるもの、IV類：無袖のもの、の4類に分類したうえで、玄門部の各種要素を細分して検討を行っている<sup>(9)</sup>。本稿でもこの分類を参考にし、分類を試みることとする。なお、ここでは袖石と側石の関係について、②の口を、a：袖石が独立し、側石の内側に立つ、b：

表2 島根半島東部における後期古墳・横穴墓（『町誌』より作成）

No	古墳名	所在地	墳丘	出土遺物・副葬品	参考・文献
1	福浦法田岬2号墳	福浦	●9.3 m以上	須恵器・玉頭・金環	
2	福浦法田岬1号墳	福浦		須恵器・直刀・玉頭	消滅
3	宍入古墳	美保関	●9.5×10 m		
4	宝寿寺山古墳	美保関	●8 m		
5	山嶺古墳	美保関		須恵器	
6	海崎1号墳	美保関・海崎	■9.5 m	須恵器	横穴系横口式石室
7	海崎3号墳	美保関・海崎	●9.5 m	須恵器・金環	横穴系横口式石室
8	天神社裏2号石室	美保関・海崎		須恵器・紙石・金環・鉄鏃	横穴系横口式石室
9	天神社裏3号石室	美保関・海崎		須恵器・玉頭・刀子・鏡・鉄針	横穴系横口式石室
10	前屋古墳	美保関・経尾		須恵器	
11	奉加谷1号墳	雲津・奉加谷			
12	奉加谷2号墳	雲津・奉加谷		須恵器・勾玉	
13	長浜道古墳	雲津・長浜道	●10 m		
14	男鹿古墳	福浦・男鹿			
15	福浦1号墳	福浦		須恵器・鉄刀	
16	福浦2号墳	福浦			
17	森山古墳	森山・日向浦			
18	郷の坪古墳	森山・郷の坪		須恵器	
19	西ノ谷1号墳	森山・西ノ谷			
20	大矢尾1号墳	七ヶ所・向浜			
21	大矢尾2号墳	七ヶ所・向浜			
22	七ヶ所古墳	七ヶ所・郷土			
23	早稲田古墳	七ヶ所・須郷		勾玉	
24	雞子1号墳	七ヶ所・雞子			
25	雞子2号墳	七ヶ所・雞子		須恵器	
26	向畠1号墳	片江・向畠		須恵器	
27	向畠2号墳	片江・向畠			
28	向畠3号墳	片江・向畠		須恵器・土師器	
29	小丸山古墳	片江・向畠		須恵器？	
30	岩山1号墳	千鶴・岩山	●6.3×7.5 m		
31	岩山2号墳	千鶴・岩山	●7.8×7.2 m		
32	岩山3号墳	千鶴・岩山	●8.8×8.9 m		
33	岩山4号墳	千鶴・岩山	●6.8×7.8		
34	岩山5号墳	千鶴・岩山	●7.6 m		
35	岩山6号墳	千鶴・岩山	●7.8×9.6 m		
36	岩山7号墳	千鶴・岩山	●7.7×7.8 m		
37	中峯山古穴	美保関・海崎		須恵器	消滅？
38	女房岩横穴群	森山・女房岩		須恵器	
39	殿川内穴群	森山・殿川内			
40	胸墳横穴	森山・胸墳		須恵器	
41	片江横穴群	片江・深浦			

袖石は側石に挟み込まれている、の2つに細分している。また、図面が無いものについても『町誌』の記述から可能な限りデータ化してまとめてある。

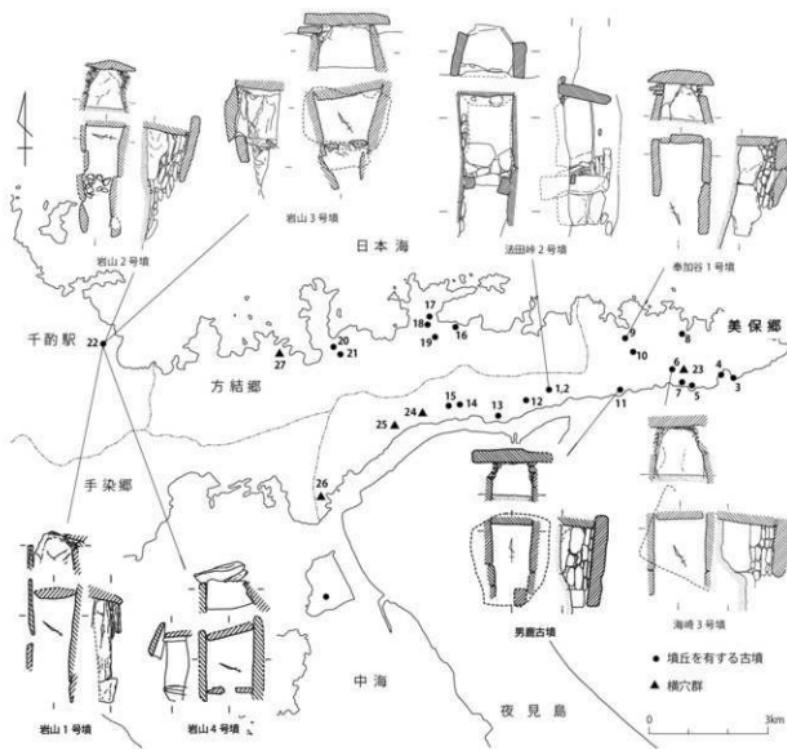
結果として、断片的ではあるものの、島根半島東部の横穴式石室の特徴として以下のようないくつかの特徴が見えてくる。

①袖石は立柱状に立ち、側石に組み込まれず、内側に独立して立つ。

②奥壁は1段で両側石に挟み込まれる。

③側石の基底部には腰石を用いる。

この中にあって岩山3・4号墳は平面が正方形に近く、側石も1枚を指向することから、石棺式石室の影響を受けた石室と従来より理解されている。しかし、奥壁が側石に挟み込まれ、玄門部も例抜



第31図 島根半島東部の横穴式石室の構造比較（『町誌』より加筆修正）

式ではなく立柱状の袖石が側石から独立していることから、他の島根半島東部の石室の特徴と共に通する要素も併せ持っている。

また、玄門の構造は両袖式であることが一般的に見えるが、一部片袖式の石室も存在していることも注意が必要である。ただ、玄門部が良好に残っている古墳は少ないため、片袖としているものの中にも両袖となり得る可能性もあるため、現時点では両袖式と片袖式の石室の両方が存在する地域としておきたい。

この他、腰石から上の側石については、石の積み方に違いが認められる。福浦法田岬2号墳は玄室の腰石上に残る石から、削石を小口積みにしていたことが推測される。一方で男鹿古墳や海崎3号墳の石室は横目地を通す傾向にある石の積み方をしている。島根半島東部の横穴式石室の玄室面積に大きな違いは見られないが、福浦法田岬2号墳の玄室面積が約2.8m<sup>2</sup>に対し海崎3号墳は4.25m<sup>2</sup>以上と、玄室規模の差が認められることから単純な比較はできないが、側石の積み方の違いは時期差に起因するものとも考えられる。ただ、現時点では本古墳以外で築造時期が明確に判明している古墳

表3 島根半島東部の横穴式石室の構造

古墳	①玄門形態	②袖石と側石	③玄室天井石	④側石の石積み段数	⑤奥壁石積み	⑥奥壁と側壁	⑦玄室規模(m)	⑧玄室長/奥壁幅
1 福浦法田跡2号墳	I	イ a		a 4~5段	1段?	a	2.0×1.4	1.43
3 寄入古墳				a 2~3段?	1段?		1.1以上×1.0	1.1以上
4 宝寿寺山古墳				1枚?	a 3~4段?	1段?	a	1.0以上×1.2
6 海崎3号墳				1枚	a 5段	1段	a	2.5以上×1.7
9 豊加谷1号墳					a 4段	1段	a	2.0以上×1.5
10 豊加谷2号墳					a?			1.3以上
11 男房古墳	II				a 4~5段	1段	a	2.1×1.4
15 西ノ谷1号墳					a?			?×1.4?
16 大矢尾1号墳	I ? II ?	イ?			a?			
17 鋼土古墳		イ a			a 3~4段?		2.0?×?	
19 鴨子1号墳	I ?	イ a		1枚	a 3~4段	1段	a	2.2×1.0以上
20 鴨子2号墳					a?			?×1.3?
22 逍山1号墳	II ?				a 2~3段?	1段	a	?×1.5
逍山2号墳	II ?			1枚	a 5~6段	1段	a	1.6?×1.3
逍山3号墳	I	イ a		1枚	a 1~2段	1段	a	1.5×2.1
逍山4号墳	I	イ a		d	1段	a	1.6×1.6	1.0

表3の説明

- ① I : 両袖式石室 ② 片袖式石室 ③ : 柱袖式石室 ④ : 無袖式石室  
 ⑤ : 袖石は左のもの構造の異なり、単独の石あるいは複数の石で築かれている。  
 ロ : 袖石は立柱間に1石に立つ。  
 ハ : 袖石は立柱間に2石に立つ。  
 パ : 袖石は側石に挟み込まれている。  
 ハ : 玄門が組み合わせの袖石天井をなし、側壁に挟み込まれるもの。  
 ニ : 立柱状の袖石の下には単独でたつが、上部は側壁に挟まれるもの。  
 ホ : 袖石が側壁に挟まるもの。  
 ⑥ a : 基部に大形の板石を置き、上部に割石を小口積みにするもの。  
 b : 大形剥石を3~7段に積むもの。  
 c : 割石小口積みのもの。  
 d : 割石1枚石のもの。  
 ⑦ a : 両側壁で奥壁を挟むもの。 B : その他

がないため、明言は避けたい。今後の調査事例が増えれば出土遺物の新旧から半島東部における横穴式石室の形態の変遷を述べることも可能となり、さらには半島東部においてさらなる小地域差などを見いだせるかもしれないが、これは今後の残された課題と言えるだろう。

以上、島根半島東部における横穴式石室の特徴について検討したが、福浦法田跡2号墳の石室形態は当地域における石室形態の特徴である3つの特徴を備えた形態と言えるように思える。また、墳丘規模においても島根半島東部に広がる一般的な古墳の範疇に含まれ、おそらくは福浦の地を治める首長であると推測される。無論、多くの古墳が元の形態を留めず、本格的な調査事例のないうえでの検討であるため、今後データの修正を含め、見直しの必要性に迫られるとも思われる。ただ、発掘調査が行われたことにより、主体部の詳細な情報と、何よりも築造時期が明らかとなった本古墳の調査事例を軸にすることにより、当地域における横穴式石室のさらなる詳細な検討が行われるべきものと考える。

## 第6節 周辺地域と比較した島根半島東部の横穴式石室の特徴

福浦法田跡2号墳の築造時期は出土した須恵器の型式から大谷編年出雲4期の段階に位置付けられると思われる。出雲地方において出雲4期になると出雲東部と西部の横穴式石室の構造の違いが明確になる。既に多くの研究成果が発表されているので詳細は省くが、同時期の出雲東部では石棺式

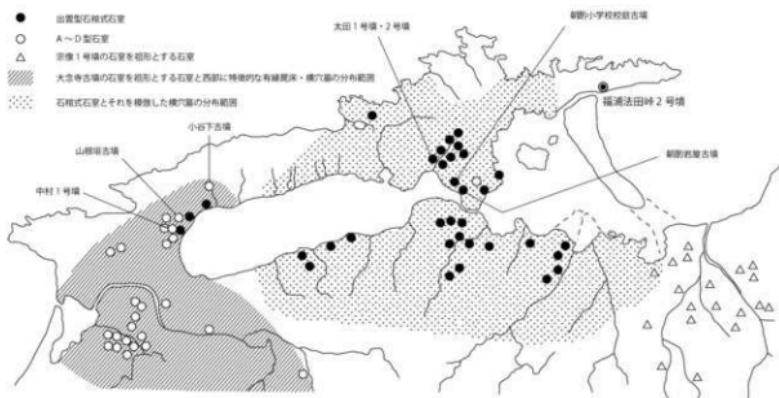
石室が定型化し、広域的に展開する時期に当たり、西部では神門郡で出現した今市大念寺古墳を祖形とする両袖式の石室が出雲郡・橋縫郡へ拡大する様相を見せる。また、伯耆に目を向けると、日野川下流域にも米子市宗像1号墳を祖形とした両袖式の石室が分布し、各地で地域型の石室が成立・展開していく<sup>(10)</sup>。このような地域型石室の分布域を示したものとして第32図がある。この図によると、島根半島東部は隣接する出雲東部の石棺式石室の影響が及んでいない地域となっている。また、『中村1号墳』では従来の研究成果を取り入れつつ、古墳の所在する出雲西部のみならず、東部の石棺式石室を含めた石室構造の詳細な比較検討がなされているが、島根半島東部の石室については触れられていない。

前節では限られた情報の中で、半島東部における横穴式石室の様相について検討したわけであるが、ここでは、発掘調査によって石室構造が明らかとなった福浦法田岬2号墳石室と島根半島における同時期の横穴式石室を比較することで半島内における他地域との関連性、もしくは相違を見てみたい。

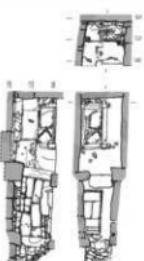
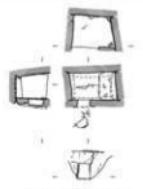
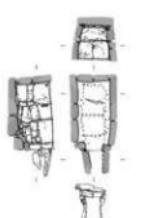
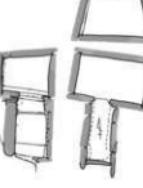
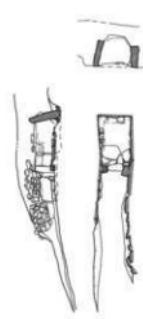
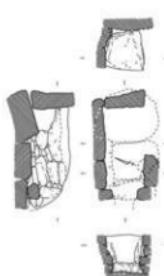
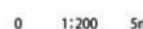
第33図は島根半島における大谷編年出雲4期の横穴式石室を掲載した。なお、ここで記載した島根半島中部・西部とは便宜上、『出雲国風土記』に記載のある郡・郷を単位とし、中部は島根郡の加賀・山口・朝鈴郷から秋鹿郷まで、西部は出雲郡北部と橋縫郡とする。

まず島根半島中部においては意宇郡を中心に広がる石棺式石室が朝鈴郷にも存在し、太田古墳群がある山口郷、現在の東持田町にまで広がる。石室の形態はいざれも福浦法田岬2号墳の両袖式石室とは明らかに一線を画すものである。なお、この時期における島根半島中部の石棺式石室を有する古墳の墳形は不明なものが多いが、基本的に方墳が優勢であるのに対し、島根半島東部の後期古墳は円墳が多数を占める点においても明らかな地域差が見られる。

統いて島根半島西部の石室の様相であるが、この時期の半島西部において最大規模の石室を有する



第32図 出雲地域の横穴式石室と地域色 (大谷 2001 を一部加筆・修正)

須恵器 編年	石室 編年 <sup>12</sup>	島根半島西部 (出雲郡北部)	島根半島中部 (秋鹿・島根郡西部)	島根半島東部 (島根郡東部)
		 <p>中村1号墳</p>	 <p>新町小学校校庭古墳</p>	
出雲4期	2期	 <p>山根塙古墳</p>	 <p>新町岩屋古墳</p>	 <p>福浦法田峠2号墳</p>
		 <p>小谷下古墳</p>	 <p>太田1号墳</p>	
			 <p>太田2号墳</p>	

第33図 島根半島における出雲4期の横穴式石室

中村1号墳をはじめとして両袖式の石室が広がる地域となる。中村1号墳では玄室側壁最下段は1石であり、山根垣古墳には基底石に上段と比較して大型の腰石を用いるなど、部分的には島根半島東部の石室との共通性も見いだせるのだが、奥壁には2段以上の切石を積むなど、石室構造全体を見ると福浦法田岬2号墳とは異なる構造と言える。さらに最大の違いは玄門の立柱石が側石に挟み込まれる点である。よって、島根半島西部との関連性・共通性を見出すことは難しい。

以上のことから、島根半島東部の横穴式石室は、半島内において独自の石室構造が展開していたと認められる。

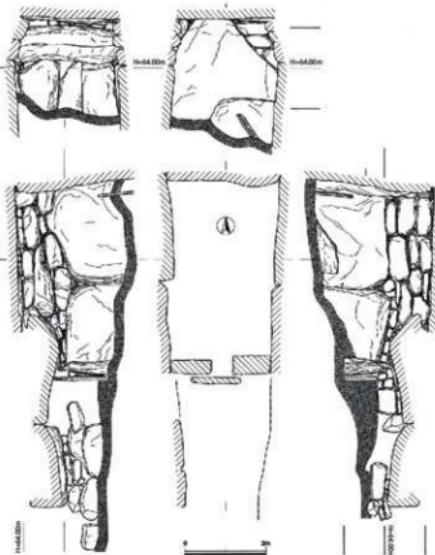
ここで、さらに伯耆西部の石室との比較をしてみたい。伯耆西部、特に日野川下流域は美保湾で隔てられているとはいえないに目視でき、海上交通に頼れば比較的容易に往来が可能と思われることから、ある意味隣接した地域とも言える。

伯耆西部における横穴式石室は、宗像1号墳を祖形とする、出雲東部とはまた異なる地域型の石室が展開していた地域である。この地域についても石室の特徴についていくつか言及がある。その中で角田氏の論考<sup>(13)</sup>によると、基部に大形の板石を据えて上部に割石を小口積みにし、奥壁を1枚石を基本とするものをA類とし、法勝寺川下流域・小松谷川流域・日野川右岸に広く見られる構造としている。同地域に広がるA類石室の中で6世紀末～7世紀ごろの伯耆西部を代表する古墳として米

子市石州府1号墳が挙げられる。

この石室構造は前述のA類石室であると共に、玄門部は袖石を側壁に組み込まず、側壁の内側に立てて両袖としている。角田氏の分類に従うならば、福浦法田岬2号墳をはじめとして半島東部の石室はA類石室に含まれるうえ、玄門の構造など、多くの共通性を見出すことができる。しかし、これ以上の検討となると、さらなる調査例を待たなければならない。

だが、これまで見てきたように、島根半島東部の石室形態は伯耆西部からの影響を受けていると思われるの、ここでは伯耆西部の石室との技術的共有、もしくは模倣の可能性があると言うに留めておきたい。



第34図 石州府1号墳実測図(1:120)(報告書より転載)

## 第7節 結語

以上、今回の調査で得られた成果により、様々な視点から福浦法田峠2号墳及び島根半島東部の石室の特徴を考察し、周辺地域との比較を通じて同古墳の位置付けを行った。従来、島根半島東部における横穴式石室について触れた論考は少なかったのだが、同地域において初の本格的な発掘調査が行われ、多くの知見が得られたことにより、本稿では副葬品及び古墳の構造について考察が可能となった。ただ、1基の古墳の調査を基にした考察ではやはり限界もあり、推論にすぎる点もいくつかあったことは否めない。その中で、基底部まで完掘した横穴式石室の調査として、埴丘及び石室の構造や築造過程、島根半島東部の後期古墳の独自性と伯耆地方の関連性について言及できたことは大きな成果と言える。

今後の調査事例の積み重ねによっては、島根半島東部と伯耆西部の横穴式石室との関連性に迫ることができる一方で、逆に島根半島東部の中での小地域性が確認できる可能性もある。さらにはこれまでに見つかっている石室と合わせて小地域毎の変遷まで描きうる可能性を指摘しておきたい。いずれにせよ、今回の調査成果を足掛かりとして、さらなる調査事例の積み重ねによって同地域の古墳時代後期における様相のより精度の高い究明を期待するものである。

最後に、報告書作成にあたっては大谷晃二氏、角田徳幸氏に多くの助言を頂いた。特に大谷氏からは、報告書作成当初から様々な指導・助言の他、主頭大刀の実測等、お世話になった。記して感謝する。

### 註

- (1) 土生田純之 2003 「横穴式古墳構築過程の復元」『古墳構築の復元的研究』雄山閣出版
- (2) 前掲註(1)に同じ。
- (3) 松江市教育委員会 1998 『向山古墳群発掘調査報告書』
- (4) 島根県教育委員会 1986 『岡田薬師古墳』
- (5) 菊池芳朗 2010 「主頭大刀の編年」『古墳時代史の展開と東北社会』大阪大学出版会
- (6) 松尾充晶 2005 「出雲地域の裝飾付大刀と後期古墳『裝飾付大刀と後期古墳—出雲・上野・東海地域の比較研究—』」島根県教育庁古代文化センター・島根県教育厅理蔵文化財調査センター
- (7) 松江市教育委員会 2009 『高田尾横穴墓』
- (8) 美保町・美保関町誌編纂委員会 1986 『美保関町誌』上・下巻
- (9) 坂本豊治 2012 「横穴式石室の玄門構造からみた中村1号墳」「中村1号墳」出雲市教育委員会
- (10) 出雲考古学研究会 1987 『石棺式石室の研究』、角田徳幸・西尾克己 1989 「出雲西部における後期古墳文化の研究」『松江考古』第7号、角田徳幸 2008 「出雲の石棺式石室」「古墳時代の実像」吉川弘文館など。
- (11) 角田徳幸 1985 「法勝寺川流域および日野川下流域における横穴式石室とその系譜」『島根考古学会誌』第2集 島根考古学会
- (12) 前掲註(9) 記載の石室分類に従った。
- (13) 前掲註(11)に同じ。

### 参考文献

- 大谷晃二 2001 「上石堂平古墳と出雲西部の横穴式石室」『上石堂平古墳』平田市教育委員会
- 角田徳幸 2005 「出雲における後期古墳の墳丘構造」『島根考古学会誌第22集』島根考古学会
- 山陰考古学研究会 1996 「山陰の横穴式石室－地域性と編年の再検討－」
- 島根県古代文化センター 1999 『上塙治築山古墳の研究』
- 島根大学法文学部考古学研究室・越原1号墳発掘調査団 2016 『越原1号墳発掘調査報告書－出雲における古墳時代終末期首長墓の調査－』
- 中国四国前方後円墳研究会 2013 『横穴式石室の導入と展開』
- 牧本哲雄 1995 「伯耆地方における導入期横穴式石室の様相」『横穴式石室にみる山陰と九州－石棺式石室をめぐって－』出雲考古学研究会
- 米子市教育委員会・石州府古墳群発掘調査団 1989 『石州府古墳群発掘調査報告書』

## 土器

遺物番号	区	出土位置 出土土種	種類	器種	法量 (cm)			調理・手法の特徴	色調	備考
					直径	底径	高さ			
15-1	玄室內	玄室内面	須恵器	环身	10.7	-	3.7	外 回転へア削り、回転ナデ 内 回転ナデナデ	外 黄白色、自然色 内 黄色	
15-2	玄室內	玄室内面	須恵器	高台付环身	13.5	8.4	4.7	外 鋸齿形切削後ナデ、回転ナデ 内 回転ナデ。波状鋸文	外 灰色 内 黄色	
15-3	玄室	玄室内側丸土	須恵器	高台付环身	-	8.2	4.6	外 回転へア削り、回転ナデ 内 回転ナデ	外 灰色 内 灰色	
18-1	玄門廊(A地点)	前面東	須恵器	环器	14.9	-	4.0	外 回転へア削り、回転ナデ 内 回転ナデ、回転ナデ後ナデ	外 灰色 内 黄色	
18-2	玄門廊(A地点)	前面東	須恵器	环身	12.1	-	4.1	外 回転へア削り後ナデ、回転ナデ 内 回転ナデ、回転ナデ後ナデ	外 灰色 内 黄色	
18-3	玄門廊(A地点)	前面東	須恵器	小舟	-	2.0	14.5	外 回転ナデへア削り、回転ナデ 内 回転ナデ	外 灰色 内 黄色	
19-1	玄門廊(A地点)	前面東	須恵器	はそう	10.1	-	12.0	外 回転へア削り、回転ナデ 内 回転ナデ	外 灰色 内 黄色	
19-2	玄門廊(A地点)	前面東	須恵器	都狀双耳壺形	-	-	13.0	外 回転ナデ、削り残れキロ 内 ナデ	外 鮎形色 内 鮎形色	縦割作り技法 然成形の施有あり
21-1	西門廊(B地点)	黄褐色土砂中	須恵器	环身	11.8	-	3.8	外 ハラオシ後ナデ、回転ナデ 内 回転ナデ、回転ナデ後ナデ	外 灰色 内 黄色	
21-2		黄褐色土面	須恵器	高环	8.8	9.2	6.8	外 回転ナデ、カキ口 内 回転ナデ	外 灰色 内 黄色	二四二方透かし窓
21-3	閉塁石塚	西邊基壘地	須恵器	高环	9.2	7.7	10.5	外 回転ナデ 内 回転ナデ	外 鮎形色 内 鮎形色	二段三方透かし窓
21-4	西門廊(B地点)	黄褐色土砂中	須恵器	小舟	6.5	-	7.9	外 回転へア削り、回転ナデ 内 回転ナデ、回転ナデ後ナデ	外 灰色 内 黄色	外面に植物留跡
21-5	西門廊(B地点)	黄褐色土砂中	須恵器	環瓶	6.3	-	16.2	外 回転ナデ、回転へア削り 内 回転ナデ	外 灰色 内 黄色	縦割作り技法
21-6	西門廊(B地点)	黄褐色土砂中	須恵器	橫瓶	7.6	-	15.5	外 回転ナデ、横ナデ、カキ口 内 回転ナデ	外 灰色 内 黄色	D22と同一個体
21-7		黄褐色土面	須恵器	長颈瓶	8.0	6.5	16.7	外 回転へア削り、回転ナデ 内 回転ナデ、ナデ	外 に高い小輪沿い～灰白色 内 低い小輪沿い～灰白色	外面に灰覆りあり
21-8	西門廊(B地点)	黄褐色土砂中	須恵器	平瓶	-	13.2	13.4	外 回転ナデ、タクキ後ナデ、カキ口 内 回転ナデ	外 灰色 内 黄色	外面に重輪面あり
21-9		黄褐色土面	須恵器	带腰加底部分	-	4.8	-	外 タケナカナデ 内 タケナカ	外 灰色 内 黄色	D1・D2・D8 比合
23-1	祭祀土坑	土坑内	須恵器	环器	14.0	-	4.5	外 回転へア削り、回転ナデ 内 回転ナデ	外 黄白色 内 成熟銀色	
23-2	祭祀土坑	土坑内	須恵器	环身	12.2	-	4.5	外 回転ナデ 内 回転ナデ、ナデ	外 灰色 内 灰色	
23-3	祭祀土坑	土坑内	須恵器	环器	13.0	-	3.9	外 回転へア削り 内 回転ナデ	外 灰色 内 黄色	
23-4	祭祀土坑	土坑内	須恵器	环身	12.4	5.8	3.9	外 回転へア削り、回転ナデ 内 回転ナデ	外 黄白色 内 黄白色	
23-5	祭祀土坑	土坑内	須恵器	环器	13.1	-	3.3	外 回転ナデ、ヘラオシカ 内 回転ナデ	外 灰色 内 黄色	表み激しい 大ぶくれあり
23-6	祭祀土坑	土坑内	須恵器	环身	11.2	9.0	2.9	外 回転へア削り後回転ナデ、回転ナデ 内 回転ナデ	外 灰色 内 黄色	熱成形の痕跡あり

遺物番号	用例	最大高 (mm)	最大厚 (mm)	孔径 (mm)		側面幅 (mm)	測定厚 (mm)	重量 (g)	色調
14-1	勾玉(赤メノウ質)	44	12	8	4	15	12	16.06	暗赤褐色・半々透明
14-2	勾玉(赤メノウ質)	33	11	6	3	13	10	8.78	暗赤褐色・半々透明
14-3	勾玉(赤メノウ質)	27	8	6	3	10	8	4.60	黄褐色・半々透明
14-4	勾玉(赤メノウ質)	23	8	4	2	7	7	2.76	暗赤褐色・半々透明
14-5	勾玉(赤メノウ質)			6	3		8	2.32	深白色・半々透明
14-6	勾玉(褐色凝灰岩質)	17	4	5	2	6	3	0.62	褐暗灰色・不透明
14-7	勾玉(水晶質)	19	7	4	1	8	7	2.08	無色・透明
14-8	小玉(ガラス質・青)	8	5	2		6	5	0.44	透明色・半々透明
14-9	小玉(ガラス質)	8	6	4		7	5	0.41	明暗灰色・不透明(混化)
14-10	質玉(碧玉質)	8	20	4	3	8	8	2.26	暗緑色・不透明
14-11	質玉(水晶質)	8	20	5	4	8	7	2.13	無色・透明
14-12	切子玉	15	24	4	4			6.44	無色・透明

# 写 真 図 版





1 調査現場から大山（伯耆富士）を望む（北西から）



2 調査前遠景（西から）

図版2



1 墳丘断面(南から)



2 墳丘断面東側(南から)



1 墳丘西側断面(南から)



2 周溝断面(南から)

図版4



1 主体部検出状況(南から)



2 側石基底石検出状況(南西から)



1 主体部全景(南から)



2 羨道部から玄門・玄室を望む(南から)

図版6



1 玄室完掘状況(北から)



2 玄室東側壁(西から)



3 玄室西側壁(東から)



4 耳環・勾玉出土状況(東から)



5 同左拡大(東から)



6 玄室内須恵器・圭頭大刀検出状況(北東から)



7 同左拡大(北東から)



1 玄門部袖石・框石(南から)



2 右袖石検出状況(西から)



3 左袖石検出状況(南から)



4 玄門前集石(東から)



5 右袖石根固め石検出状況(西から)

図版8



1 羨道部右側壁検出状況(西から)



2 羨道部左側壁検出状況(東から)



1 羨道部土層断面(南から)



2 左側壁根固め石検出状況(南西から)



3 右側壁根固め石検出状況(南東から)



4 玄室両側壁・奥壁根固め石検出状況(南から)



5 SK01検出状況(南から)

図版10



1 完掘状況(南から)



2 調査指導風景



3 作業風景①



4 作業風景②



15-1



15-2



15-3

1 玄室出土須恵器・土師器



18-1



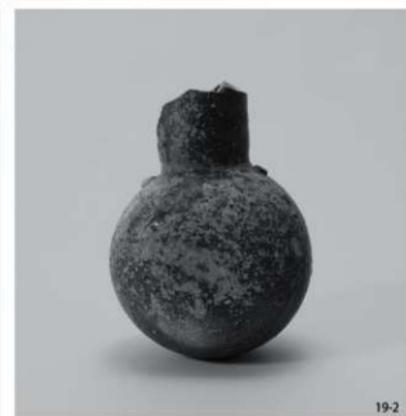
18-2



18-3



19-1



19-2

2 玄門部出土遺物



21-1



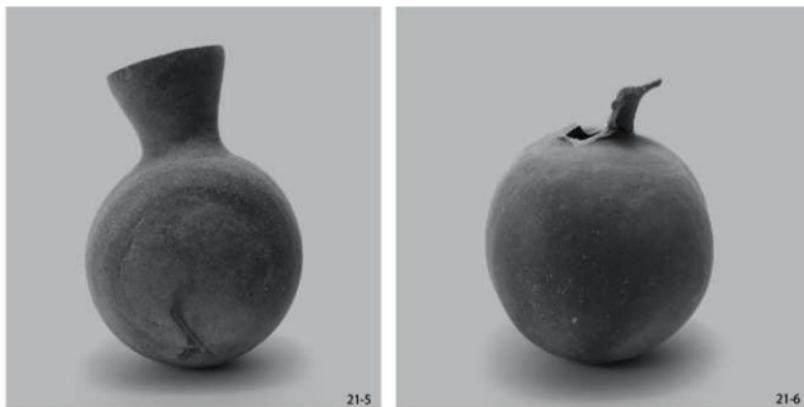
21-2



21-3

3 羨道部出土須恵器（1）

図版 12



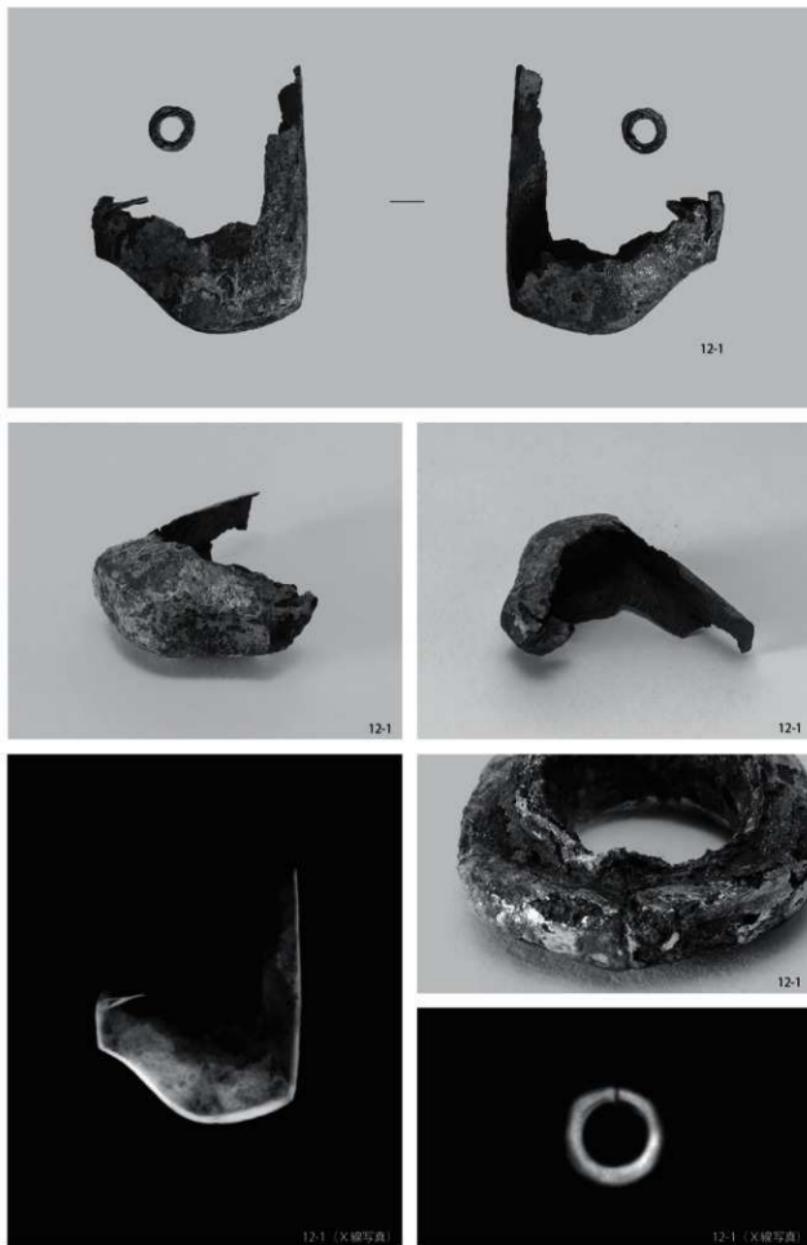
1 美道部出土須恵器（2）



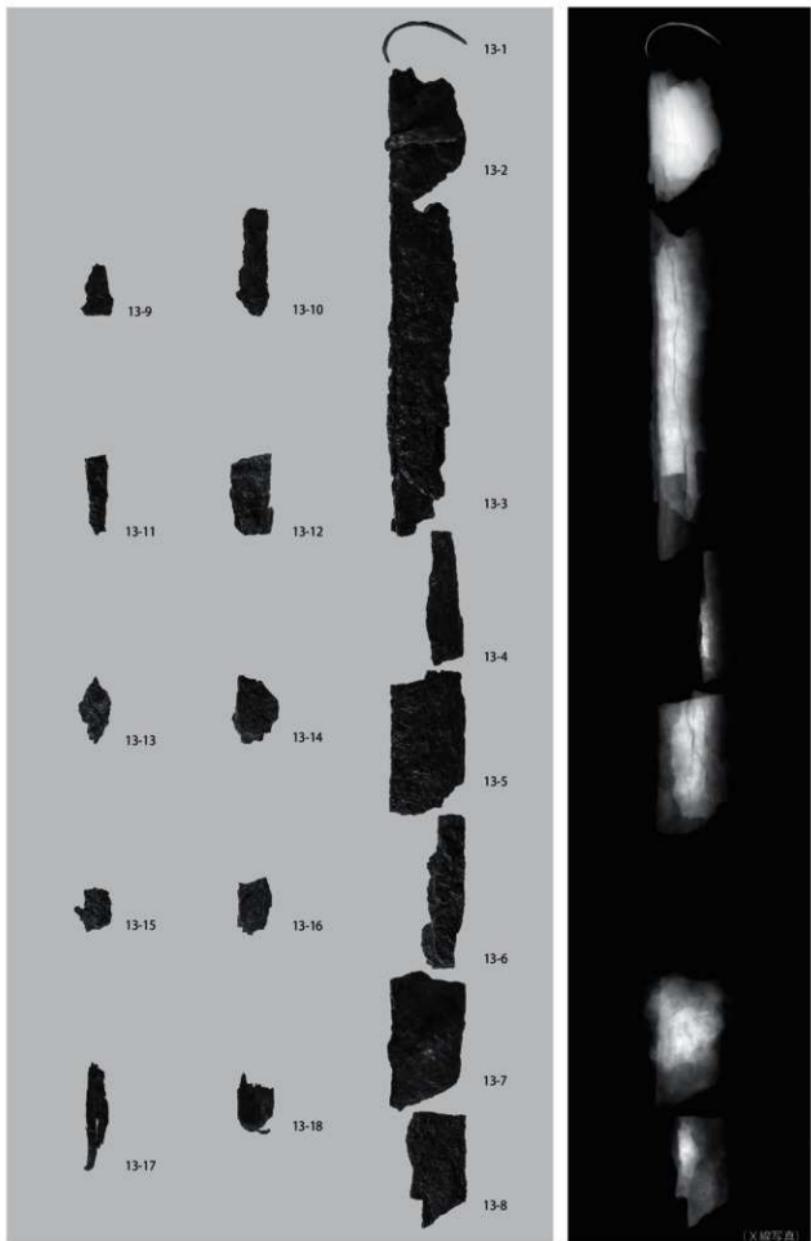
1 美道部出土須恵器（3）



2 SK01 出土須恵器



1 売頭大刀柄頭



1 土頭大刀刀身

(X線写真)

図版 16



1 玄室内出土耳環



2 犬道部出土鉄製品

# 報告書抄録

ふりがな	ふくうらほうだとうげ2ごうふん						
書名	福浦法田岬2号墳						
副書名	市道福浦法田線道路改良その6工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
卷次							
シリーズ名	松江市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第184集						
編著者名	川西 學						
編集機関	松江市教育委員会 (松江市歴史まちづくり部 まちづくり文化財課 埋蔵文化財調査室) 〒690-8540 島根県松江市末次町86番地 TEL: 0852-55-5284						
所在地	公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団 (埋蔵文化財課) 〒690-0401 島根県松江市島根町加賀1263-1 TEL: 0852-85-9210						
発行年月日	2018年3月						
所取遺跡名	所在地	コード		北緯	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	東経			
ふくうらほうだとうげ 福浦法田岬 2号墳	しまねけんまつえし 島根県松江市 みはのせきとうとうくわな 美保関町福浦 501番地2	32201	I-110	35° 55' 54" 133° 25' 67"	20151210 ～ 20160226	122.32m <sup>2</sup>	道路改良工事
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
福浦法田岬 2号墳	古墳	古墳時代 後期	横穴式石室を 埋葬施設とする 古墳1基	圭頭大刀 耳環 玉類 須恵器 土師器	古墳時代後期(6世紀末～7世紀初頭)の円墳。主体部は両袖の横穴式石室。主体部から圭頭大刀片や勾玉などの玉類・金銅製の耳環のほか、須恵器が出土した。 松江市美保関町地内では初の発掘調査が行われた後期古墳となり、同地域における古墳時代後期の様相を知るうえで、貴重な調査成果が得られた。		

松江市文化財調査報告書 第184集

市道福浦法田線道路改良その6工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

## 福浦法田峠2号墳

平成30(2018)年3月

発行 烏根県松江市教育委員会

公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団

印刷 有限公司 松陽印刷所

島根県松江市学園南2-3-11